KYUSHU
UNIVERSITY



九州大学

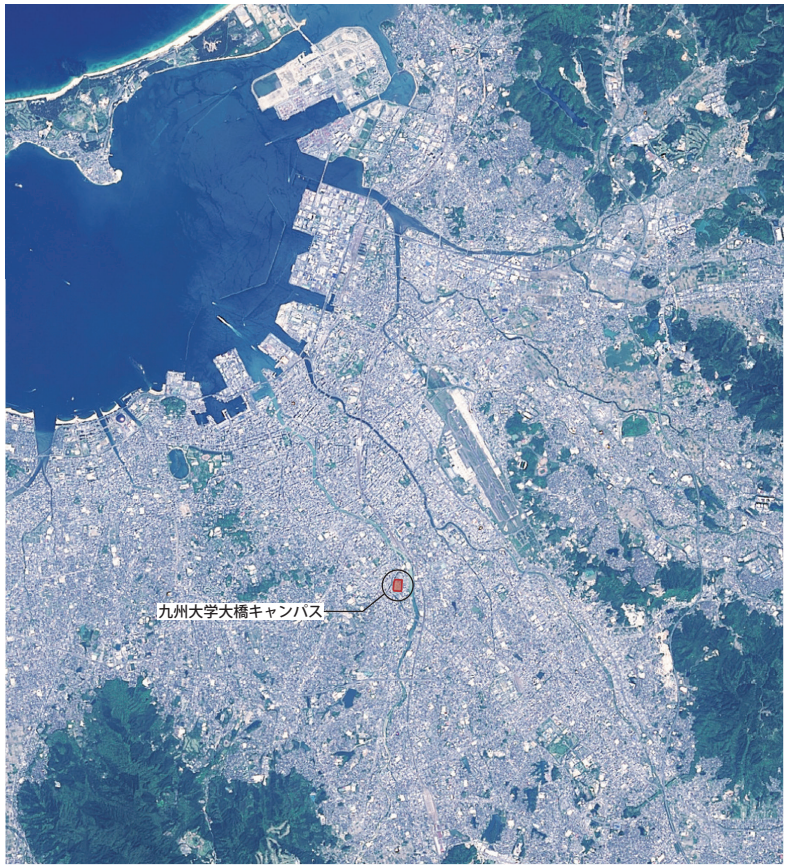
九州大学 大橋キャンパスマスタープラン2022

九州大学

九州大学
大橋キャンパスマスタープラン 2022

KYUSHU University
OHASHI Campus Master Plan 2022





画像出典：国土地理院（https://maps.gsi.go.jp）GSI Maps を加工して作成

はじめに

福岡は、古来よりアジアに向けた我が国のゲートウェイ、国際交流の拠点として繁栄してきた歴史を持つ。進取の気性に富み、自由で明るい気風に溢れ、美しい海と豊かな緑に包まれ、住み心地も良く、学術の研鑽を積むのに最高の環境が整っている。九州大学は医科大学と工科大学とからなる九州帝国大学として 1911（明治 44）年に設置され、１世紀以上にわたり、新しい研究成果を生み出す学風を維持し、多方面に通じた知識人となることなどを主眼として、創造性に富み人間性豊かな人材の育成に努め、優秀な人材を多数輩出してきた。それとともに、中核的な研究・教育拠点として、我が国最高の大学を目指し、切磋琢磨しながら、世界に冠たる優れた研究業績を積み重ねている。大橋キャンパスは 1968（昭和 43）年の開設以来、国際的な先端研究を踏まえて、全国の大学や高等専門学校で様々な分野の教育を受けた学生、社会人学生、留学生が学ぶ場として発展し、国内外で活躍する研究者や高度技術者を輩出してきた。

九州大学の役割と歴史・伝統を踏まえ、大橋キャンパスの将来に向けた大橋キャンパスマスタープランは、15 年後の 2037 年を目標年次として、持続可能な都市型キャンパスとしてのあるべき姿を示すものであり、先端科学の融合拠点としての各研究・教育施設が、キャンパス内に機能的に適切に配置されるよう、その計画と整備の指針として取りまとめた。このマスタープランの実現によって、学生、教職員のみならず市民も含む様々な利用者が満足できる環境の構築を目指すものである。

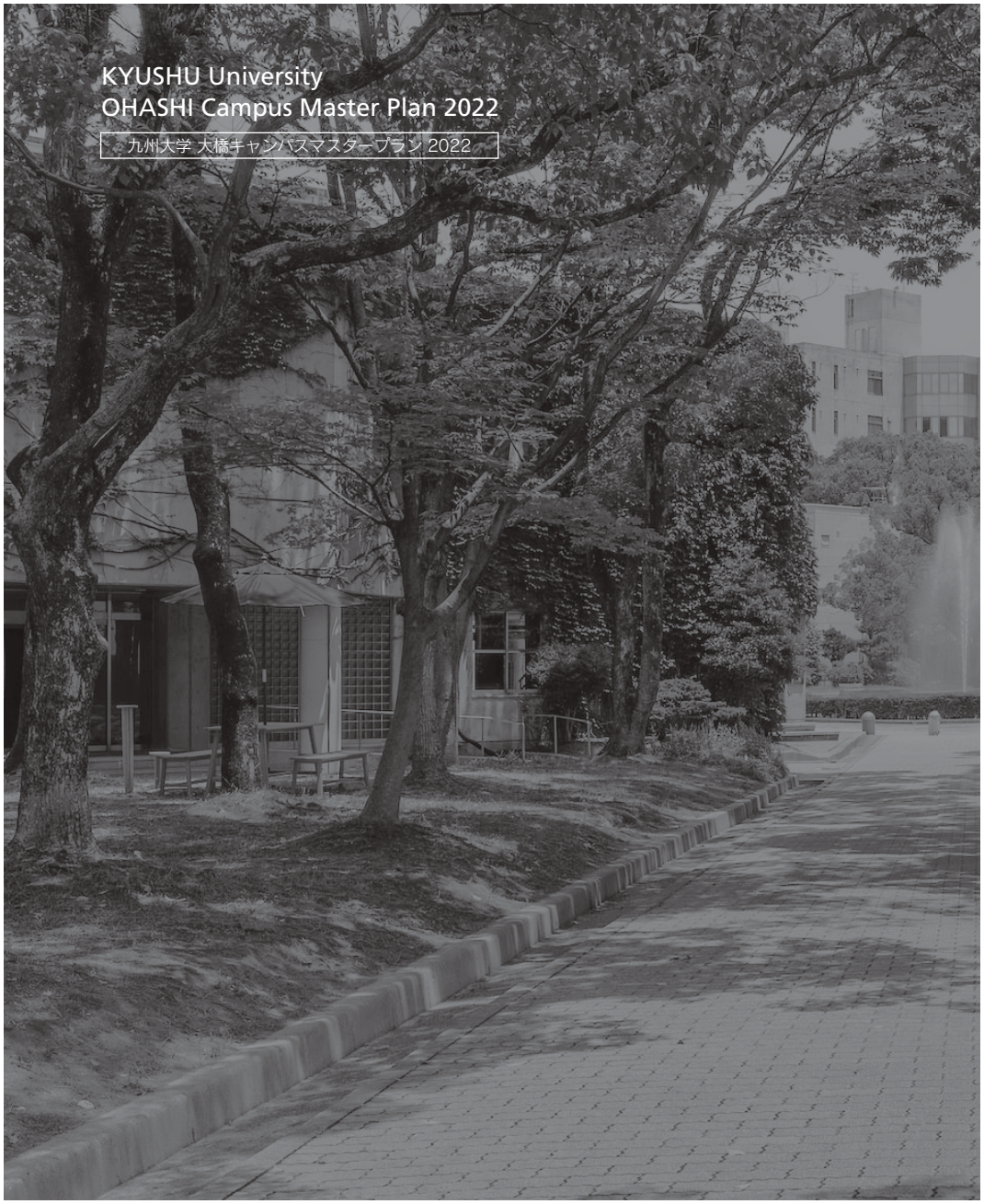
九州大学
大橋キャンパス
マスタープラン 2022

目次

第 1 章　大橋キャンパスマスタープラン 2022 について ・・・・・・・・05
1-1　アカデミックプランを支えるキャンパスマスタープラン ・・・・・・・・・07
1-1-1　キャンパスマスタープラン策定の主旨 ・・・・・・・・・・・・・・・07
1-1-2　キャンパスマスタープランの役割 ・・・・・・・・・・・・・・・・・07
1-1-3　キャンパスマスタープランの位置付けと運用 ・・・・・・・・・・・・08
1-2　大橋キャンパスマスタープラン 2021 の構成 ・・・・・・・・・・・・・・09
1-3　大橋キャンパスの目標像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
1-4　大橋キャンパスの目標像の実現に向けた整備方針 ・・・・・・・・・・・15
1-4-1　九州大学が目指す大学像と大橋キャンパスマスタープラン・・・・・・15
1-4-2　大橋キャンパスの計画と整備の方針 ・・・・・・・・・・・・・・・・16

第 2 章　大橋キャンパスの概要および現況 ・・・・・・・・・・・・・・19
2-1　大橋キャンパスの立地環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
2-2　大橋キャンパスの概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
2-2-1　大橋キャンパスにおける組織の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・25
2-2-2　大橋キャンパスの基本情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
2-2-3　大橋キャンパスにおける組織のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・・・27
2-2-4　大橋キャンパス空間の変容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
2-3　キャンパス計画と整備における関連法規 ・・・・・・・・・・・・・・・・28
2-4　キャンパスの現状と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
2-4-1　ランドスケープ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
2-4-2　建物用途および配置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
2-4-3　建物高さ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
2-4-4　キャンパスの境界 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
2-4-5　オープンスペース ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
2-4-6　緑地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
2-4-7　ストリートファニチャー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
2-4-8　サイン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
2-4-9　光環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
2-4-10　交通動線 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
2-4-11　駐車場 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
2-4-12　駐輪場 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
2-4-13　建物の経年および耐震性能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
2-4-14　エネルギー消費量およびコスト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
2-4-15　インフラストラクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

第 3 章　マスタープラン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
3-1　大橋キャンパスの骨格／計画の前提 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
3-2　全体計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
3-3　要素別計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
3-3-1　緑地・植栽 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
3-3-2　建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
3-3-3　動線および駐車場・駐輪場 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
3-3-4　光環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
3-3-5　ストリートファニチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
3-3-6　サイン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
3-3-7　インフラストラクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
3-3-8　カーボンニュートラルの達成を目指したその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築計画 ・・・・・・・・・86



KYUSHU University
OHASHI Campus Master Plan 2022

九州大学 大橋キャンパスマスタープラン 2022



第 1 章　大橋キャンパスマスタープラン 2022 について

1

1-1　アカデミックプランを支えるキャンパスマスタープラン
1-2　大橋キャンパスマスタープラン 2022 の構成
1-3　大橋キャンパスの目標像
1-4　大橋キャンパスの目標像の実現に向けた整備方針

1-1 アカデミックプランを支えるキャンパスマスタープラン

1-1-1　大橋キャンパスマスタープラン策定の趣旨

大橋キャンパスマスタープランは、将来にわたり善き知の探求と創造・展開の拠点として、人類と社会に真に貢献し得る研究活動の推進（「九州大学学術憲章」より）、我が国と世界より支持される高等教育の推進（「九州大学教育憲章」より）を目指すことを基本とし、自主・自律的に継承と変革を行い活き続けるための「九州大学行動計画～新たな百年に向けて」（2012）および「九州大学アクションプラン 2015-2020 常に未来の課題に挑戦する大学」（2015）による設定目標や実行計画に基づいて、大橋キャンパスが有する特性や個性を基盤とする目標像を提示するとともに、全ての利用者にとって魅力的で利便性の高いキャンパスの計画と整備の方針を定めたものである。

1-1-2　大橋キャンパスマスタープランの役割

（1）大橋キャンパスの目標像と現状分析に基づく課題の共有

大橋キャンパスマスタープランの役割は、周辺環境と既存キャンパスの詳細な分析に基づいてその特性や個性を解読するとともに課題や可能性を導き出し、本学のアカデミックプランと社会の変化や要請に応えることのできる将来の大橋キャンパスの目標像を提示すること、そして高度な先端デザインの拠点にふさわしく、実現可能性の高い空間デザインの方針を関係者で共有することである。

（2）土地利用における留意点と空間の質の保障

九州大学が保有する土地は、大学全体および国民の財産であり、教育・研究活動の基盤であることから、効率的かつ有効に利用することが求められる。そのため大橋キャンパスマスタープランでは、高度先端デザインの産学官連携の拠点として、また、同時にキャンパスにおける教育研究を中心とする活動を展開していくために、有効な土地利用と空間の質（クオリティ・オブ・ザ・プレイス）を保障する規範としての役割も備えている。

（3）大橋キャンパスの骨格を形成する要素と計画対象の整備方針の提示

大橋キャンパスマスタープランは、目指すべき大橋キャンパスの目標像を提示するとともに、その実現のためにキャンパスの骨格を形成する要素や土地利用、パブリックスペース、施設配置などの計画対象に関する整備方針を示している。また、大橋キャンパスマスタープランは、個別の施設の細部にわたる位置、形態、デザインを確定するものではなく、個々の施設やオープンスペースなどの設計にあたって、敷地全体の機能的連携、空間構成、景観形成上の考え方を示すものである。施設等の整備および管理・運営に際しては、常に全体的視野に立った環境形成に対する考え方をマスタープランで確認しつつ、キャンパス全体の環境への十分な配慮を行う必要がある。

パスマスタープラン

（4）大橋キャンパスの首尾一貫した秩序ある段階的整備のための指針の提示

大橋キャンパスマスタープランは、キャンパスを構成する各施設やオープンスペースなどの長期にわたる段階的な整備を首尾一貫した考え方で計画的に進めるための指針であると同時に、各整備過程での設計の評価や相互調整の拠り所となる基準である。

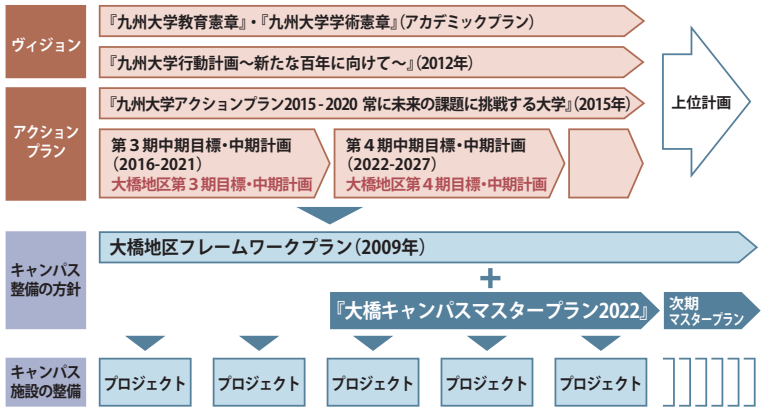
（5）時代の変化への柔軟かつ慎重な応答

今後、社会情勢や計画条件などの変化が予想されることから、キャンパスの整備と管理・運営は柔軟に対応することが求められる。キャンパスマスタープランの主要な部分の変更が必要となる場合には、九州大学の教育研究の理念を確認しつつ、慎重な学内審議を経て進めることとする。

1-1-3　マスタープランの位置付けと運用

大橋キャンパスマスタープランの上位計画として 2009 年に策定された大橋地区フレームプラン 2009 がある。しかしその後、九州大学全体の規範となる「九州大学行動計画～新たな百年に向けて（2021 年）」、「九州大学アクションプラン 2015-2020 常に未来の課題に挑戦する大学（2015 年）」さらに第 3 期中期目標・中期計画などが策定されている。したがって、大橋キャンパスマスタープラン策定に際して、これらの九州大学全体の上位計画の内容を反映させ大橋地区フレームワークプランに基づき、現況を踏まえ策定する。

さらに、本学の上位計画と大橋地区の部局による教育研究などに関する目標と計画を実現するために、施設群の秩序ある整備と管理・運営の拠り所となる全学的指針としての大橋キャンパスマスタープランを効果的に運用する（図 1-1）。

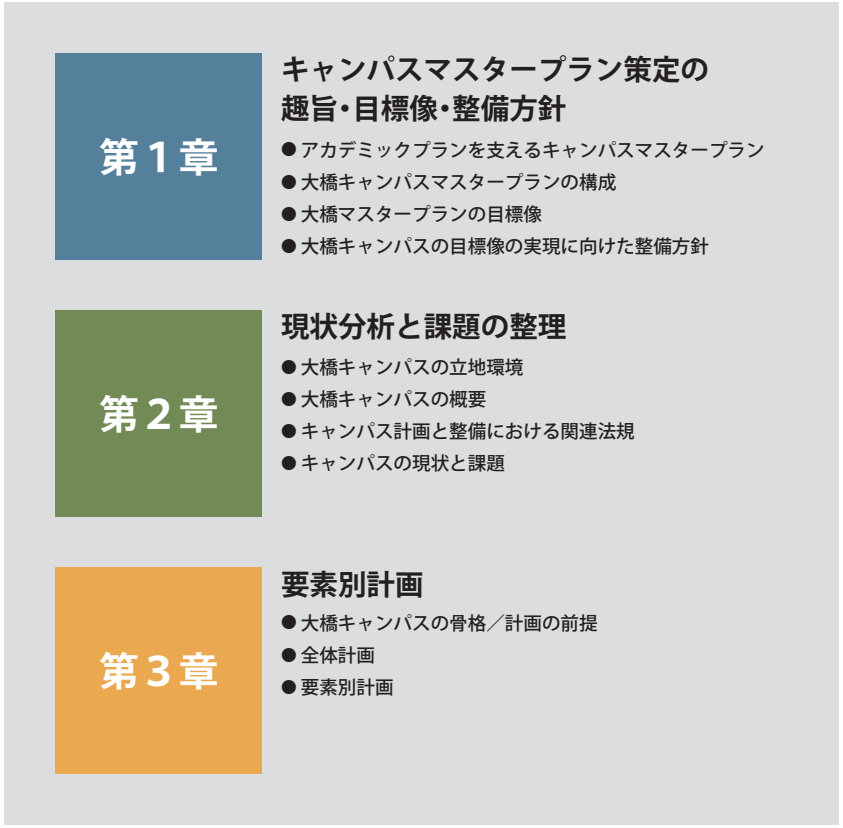


（図 1-1）マスタープランの位置づけと運用

1-2

1-2 大橋キャンパスマスタープランの構成

大橋キャンパスマスタープランは、3章で構成されている。第1章では、九州大学全体の上位計画や中期目標・中期計画、さらに大橋地区フレームワークプラン2009等を反映させた大橋キャンパスマスタープランの策定の趣旨、役割、および位置づけと運用について、さらに大橋キャンパスの目標像、実現に向けた整備方針に関して提示している。第2章では、既存キャンパスの立地環境について様々な視点から現状分析を行い、現状の課題や関連する法規等をまとめ整理している。第3章では、第1章で提示した整備方針をもとに、部門別計画を策定しまとめている。



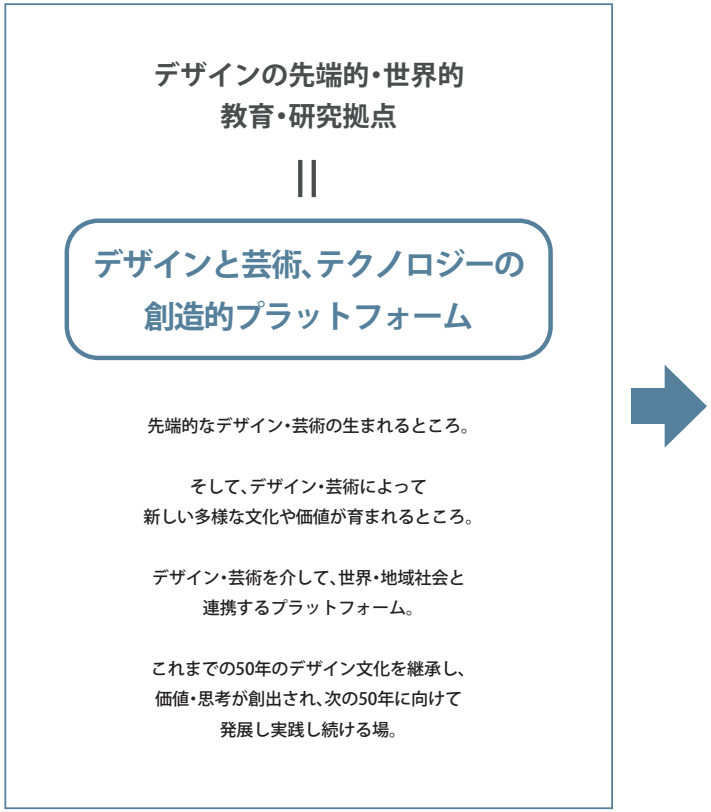
（図 1-2）マスタープランの位置づけと運用

1-3

1-3 大橋キャンパスの目標像

大橋キャンパスにおいては、全学的な目標と部局独自の目標、そして社会の要請や期待に応える形で教育研究活動が実施されている。その多様な活動を支える場であるキャンパスは、物的な空間・環境として効果的に機能することが求められ、そのためには、目指すべきキャンパスの目標像を設定し、関係者で共有することが重要である。

このような考えのもとで九州大学が長期的にめざす姿（大学像）、行動計画、そして比較的短期に取組む目標と計画（中期目標・中期計画）を俯瞰しつつ、大橋地区フレームワークプラン 2009 を踏まえ、あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレーヤーが共に創造活動を展開する「共創」の拠点である「イノベーション・コモンズ」を促進し、**デザイン教育研究の世界的拠点**となる大橋キャンパスの目標像を提示する。



（図 1-3）フレームワークプランのコンセプト

大橋キャンパスの目標像
「デザインと芸術、テクノロジーの創造的プラットフォーム」に向けて

1 「技術の人間化」をめざす実験・実践フィールドとしてのキャンパス
- 新たな時代に対応した「技術の人間化」の実験・実践を通して芸術工学の教育・研究の拠点となるキャンパス
- 課題解決型、プロジェクト型教育実践の場、人材育成の場としてのキャンパス
- デジタルファブリケーションや世界的なネットワークを通したものづくりをめざすキャンパス

2 デザインの世界的教育研究拠点となるキャンパス
- デザイン思考を活用したイノベーション人材育成に寄与するキャンパス
- 未来デザイン学センターの構築と活動拠点となるキャンパス
- 世界的ネットワークを構築し国際ハブの構築をめざすキャンパス

3 デザイン文化の集積と情報発信、交流の場となるキャンパス
- 有形・無形のさまざまなデザインを記憶・集積し、次世代へ伝えるキャンパス
- 学内外の人々がデザイン文化に容易にアクセスでき、交流の場となるキャンパス
- 世界に向けてデザイン情報の発信を行い、インタラクティブな活動拠点となるキャンパス

4 地域・社会との連携と共生をめざすキャンパス
- 産学連携、地域連携を積極的に展開し、地域社会に開かれたキャンパス
- 伊都、馬出、筑紫地区と相互に有機的な関係を保ちつつ、副都心立地を活かした九州大学全体の社会連携・共生をめざしたキャンパス
- 防犯・安全・防災機能を備え、災害時の地域拠点となるキャンパス

5 地球環境に配慮し快適で美しいサステイナブル・キャンパス
- 急激に変化する社会の要請、ニーズにも柔軟に対応できるキャンパス
- 自然エネルギーの活用や環境負荷物質の排出削減など、カーボンニュートラル、脱炭素社会の視点から、地球環境へ配慮したキャンパス
- 新たな整備手法など、多様な技術を活用しつつ、質の高い教育・研究環境をめざすキャンパス
- ユニバーサルデザインに配慮し、すべての利用者にとって安全・安心で快適なキャンパス

1-3



（図 1-4）イノベーション・コモンズのイメージ

「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」とは

・あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレーヤーが共に創造活動を展開する「共創」の拠点
・教育研究施設の個別の空間だけでなく、食堂や寮、屋外空間等も含めキャンパス全体が有機的に連携した「共創」の拠点
・対面とオンラインのコミュニケーションが融合し、ソフトとハードが一体となって取り組まれる「共創」の拠点

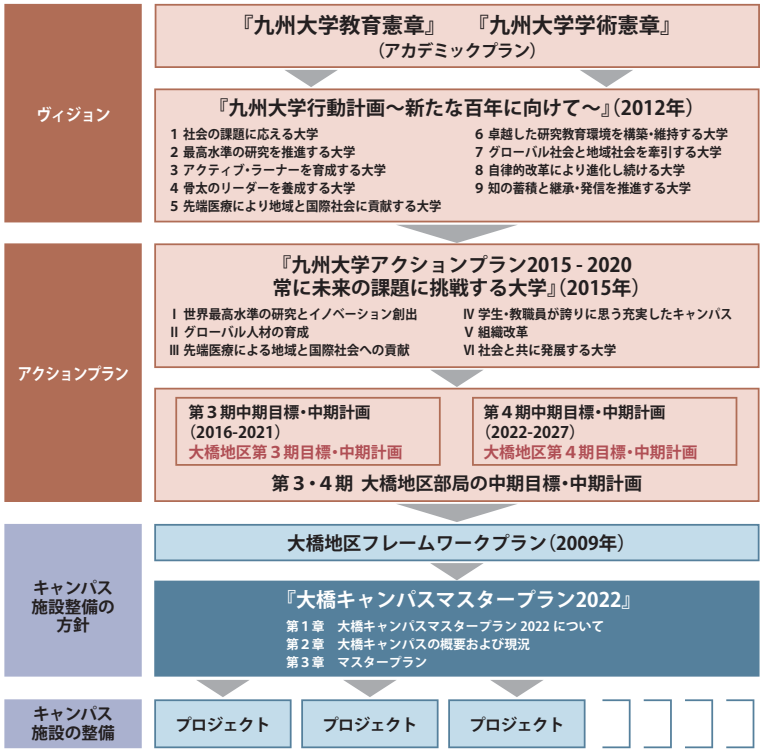
多様な学生・研究者や異なる研究分野の「共創」、地域・産業界との「共創」の促進等により、教育研究の高度化・多様化・国際化、地方創生や新事業・新産業の創出に貢献

1-4

1-4 大橋キャンパスの目標像の実現に向けた整備方針

1-4-1　九州大学が目指す大学像と大橋キャンパスマスタープラン

九州大学は、「九州大学教育憲章」、「九州大学学術憲章」のもとで「九州大学行動計画～新たな百年に向けて～」(2012)を策定し、本学が目指す姿(大学像)を提示している(図 1-3)。また、この行動計画に基づき策定した「九州大学アクションプラン 2015-2020 常に未来の課題に挑戦する大学」(2015)では、6 つのカテゴリーとともに取り組むべき具体的な計画を提示している。これらの上位計画を実現するための芸術工学部・芸術工学府・芸術工学研究院の第 3 期中期目標・中期計画において教育面におけるキーワードとして「デザイン思考」「課題解決型の授業」「学部改組」「国際化」「デジタルファブリケーション」「教育の質の保証」を掲げ、研究面においては「未来学デザインセンターの構築」「部局間連携」「サバティカル制度の活用」「ダイバシティー(多様性)」を目標として掲げている。大橋キャンパスマスタープランは、本学の上位計画や考え方、そして大橋地区部局による教育・研究に関する目標と計画を実現する拠点としてのキャンパス空間や施設整備の方針を提示する。



(図 1-5)上位計画における九州大学の大学像と大橋キャンパスマスタープラン

1-4-2　大橋キャンパスの計画と整備の方針

デザインの世界的教育・研究拠点としての大橋キャンパスの目標像を実現するために、上位計画や現状分析を踏まえ、以下のようなキャンパス整備の基本的な方針を定める。

(1)キャンパス全体に関する計画と整備の方針

1)大橋キャンパスの骨格：計画の前提となる手がかり

○既存キャンパスの骨格を形成している環境特性や構成要素を確認し、キャンパス空間の歴史性や個性を将来に継承する手がかりとする
○大橋キャンパスの目標像を実現するためのキャンパスの骨格を設定する
○歴史的な資源を維持・保全・活用し、また、特に継承すべき建物について文化財指定の登録を目指すなど、人々の愛着と誇りを醸成する環境を整備する
○継承すべき空間と戦略的に活用を図る空間を設定する

2)計画と整備の方針

■全体計画

ゾーニングおよび土地利用

○キャンパスの適切かつ合理的な利用を図るため、機能に基づくゾーンを設定し、教育研究の特性を考慮した構成、配置、規模、動線等を決定する
○部局間の連携や将来の更新を見据えた機能的・効果的な土地利用を図る
○施設の長寿命化を図り、質の高い・安全な教育研究環境を確保する
○周辺地域に対し風格や歴史性を与え、周辺環境と調和するランドスケープとするとともに、充実したキャンパスライフをもたらす魅力的な環境を整備する

■要素別計画

緑地・植栽

○歴史的、魅力的な緑地や樹木を維持・活用し、愛着と誇りを醸成する環境を整備する
○既存の緑地や樹木の状態と特性を把握・分析し、キャンパスの計画・整備に活用する
○象徴的空間、憩い空間、移動空間など空間特性に合わせた緑地、樹木の活用を図る
○多様な視点からの緑化計画を検討し、エディブル・ランドスケープの構築を図る
○維持管理コストに配慮した計画と整備を行う

建物

○部局間や各種施設との多様な連携を支援し、有効利用に適した機能・施設の集約を行う
○施設等の優先度を分類し、施設の総量の最適化と重点的な整備を行う
○長期的視点で施設等の必要性を考慮し、真に必要な施設を優先的に整備する

動線および駐車場・駐輪場

○利用者にとってわかりやすく、機能性と安全性を備える動線を確保する
○多様な利用者の属性、緊急車両やサービス車両などの通行に留意し、動線の共用・分離を適切に行う
○歩いて楽しく、キャンパス特有の雰囲気を堪能できる動線環境を維持・創出する
○キャンパス内の段階的な整備の過程で安全な移動空間となるよう道路線形を整理する
○キャンパス内施設の利便性を高める動線と駐車場、駐輪場の適切な計画と整備を行う

光環境

○安全性や防犯性、安心感や快適性をもたらす光環境づくりを行う
○各種建物や機能による空間特性を考慮し、それらと整合する光環境ゾーンを設定する
○象徴的空間、憩い空間、移動空間など空間特性や要求性能に合わせた光環境を提供する
○美観性、機能性、経済性など複数の観点に配慮した光環境の計画と整備を行う
○キャンパスの既存状態の評価分析をもとに最適な光環境の構築を図る

ストリートファニチャー

○建築物や植栽等が創出する景観的価値を支える役割とする
○キャンパス内の安全を確保し、秩序を与える配置や設計とする
○人々の利用行動に臨機応変に対応し、キャンパスに活気を創出する
○環境を構成する要素を適切に維持管理する

サイン

○利用者が「ホスピタリティ」に触れることが出来るサインデザインを構築し運用する
○多様な利用者のわかりやすさを包摂したキャンパス空間とする
○大橋キャンパスの魅力を表出するサインデザインを構築する
○キャンパス内の環境および秩序の維持管理を行う

インフラストラクチャー

○既存のインフラストラクチャーの長期的活用を前提に関連する要素間の計画を整合させる
○将来的な土地利用変更や施設再編に柔軟に対応できるルートを想定し、確保する
○災害時の安全性や迅速な復旧を保証するセーフテイネットを確実に計画し、整備する
○既存状態の評価分析をもとにインフラストラクチャーの維持・改修を計画する
○将来的な建物更新（建替え・改修）に対する柔軟性を確保する

カーボンニュートラルの達成を目指したその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築

○地球環境に配慮したサステイナブルなキャンパスをめざす
○高度なデザイン教育・研究活動を保証するキャンパスの目標像を実現し、持続可能とするための空間を構築する
○デザイン教育・研究をとりまく環境や社会要請の変化に柔軟に対応するスペースを確保する

（2）施設および空間に関する整備方針

施設全般

○創造的かつ高度なデザイン教育・研究活動を支援し、活性化する環境を整備する
○充実したキャンパスライフをもたらす魅力的で利便性の高い空間を整備する
○ユーザーの利用・活動や外部空間との連続性などを配慮した空間づくりを行う
○老朽化し安全性や機能性が低下した建物の更新・改善を図る
○教育研究をとりまく環境や社会要請の変化に柔軟に対応する空間を確保する
○環境負荷の低減や運営の持続性に配慮した施設整備を行う

教育研究施設

○アクティブ・ラーナーや次世代のリーダーを養成しうる学修空間を整備する
○高度で多様な教育研究活動に対応できる施設や空間を整備する

国際化・地域貢献

○国際化を推進しデザインにおける国際的交流拠点を整備する
○地域を活性化し、交流を促す環境の整備を行う



（図 1-6）パブリックスペースの構成要素

KYUSHU University
OHASHI Campus Master Plan 2022

九州大学 大橋キャンパスマスタープラン 2022





第２章　大橋キャンパスの概要および現況

2

2-1　大橋キャンパスの立地環境
2-2　大橋キャンパスの概要
2-3　キャンパス計画と整備における関連法規
2-4　キャンパスの現状と課題

2-1 大橋キャンパスの立地環境

（1）位置

大橋キャンパスは、福岡市南区の南東部に位置し、西側は日赤通り、東側は那珂川に近接している。周辺には、南区役所、南体育館、南図書館、福岡県警南警察所などの公共施設が立地している。

（2）交通環境

大橋キャンパスは、日赤通り、みやけ通り（国道 385 号）などの幹線道路や、JR、西鉄の駅に近接しており、博多駅や福岡空港へのアクセスがよく利便性が高い地域に立地している。

（3）自然環境

大橋キャンパス周辺は、古くから那珂川の河口付近に形成された農業地帯であった。野間大池、野多目大池などの溜池が点在し、水と緑に恵まれた環境にある。その一方で、福岡市洪水ハザードマップにおいて、那珂川氾濫時のシミュレーション予測により、大部分が浸水継続時間 12 時間未満（一部では 3 日以上）の警戒が必要な区域に立地している。

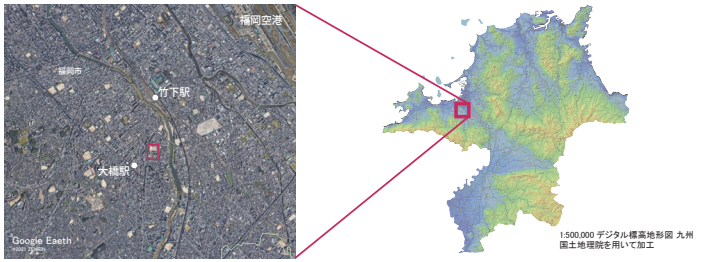
（4）歴史環境

大橋地区は、かつて筑紫郡三宅村に属しており、1933（昭和 8）年に三宅村が福岡市に合併された際、福岡市の一部となった。戦後福岡市の人口が急増し開発が進むにつれ、その交通利便性の高さから急速に市街化が進行し、1972（昭和 47）年から 1987（昭和 62）年にかけて行われた区画整備事業に伴い、大橋駅周辺において修景が施されるなど、積極的なまちづくりが行われてきた。

1927（昭和 2）年、本キャンパスの位置する場所に、福岡県筑紫中学校（後の筑紫丘高校）が開校され、その後、福岡学芸大学（後の福岡教育大学）へ転用された。1968（昭和 43）年には九州芸術工科大学が開校し 2003（平成 15）年に九州大学と結合した。

（5）社会環境

大橋キャンパスは、国立大学で唯一「芸術工学」を学問・研究領域とする部局であり、デザイン学の先導的位置に立っている。現在、新たな成長産業として注目されている「創造産業」の発展のため、産官学連携の推進や、世界中の優秀な人材の集積および育成への取り組みが求められている中、本キャンパスは、その特質やアジア諸地域とアクセスしやすい立地環境などから、グローバルで活発な創造的活動・研究拠点のひとつとして位置付けられる。



（写真2-1）大橋キャンパス周辺　（図2-1）福岡県における大橋キャンパス



（図2-2）大橋キャンパス周辺図



（写真2-2）福岡都心部（福岡城跡堀）

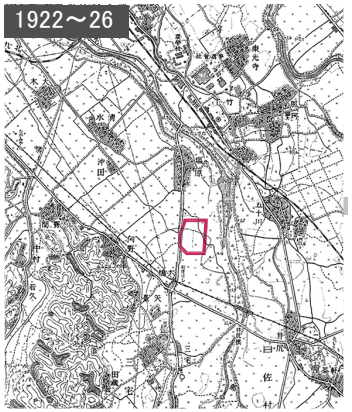


（写真2-3）博多港

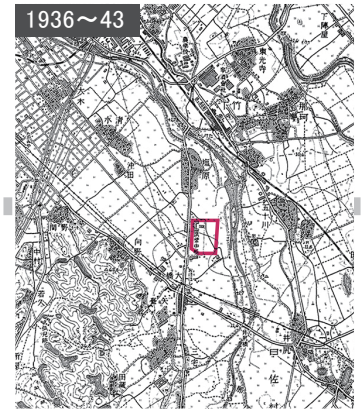


（写真2-4）福岡空港国際線ターミナル

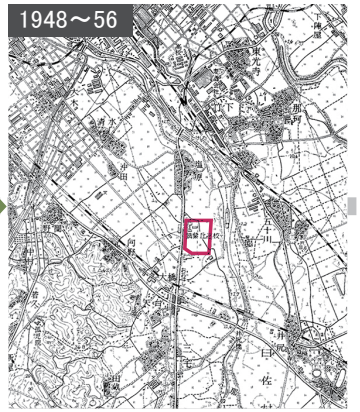
2-1



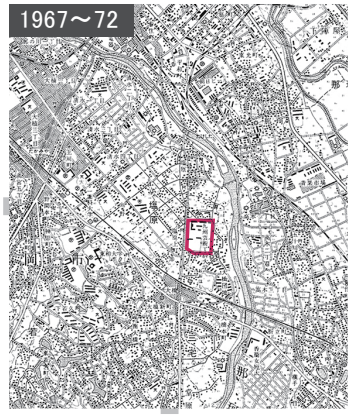
周辺一帯は、田んぼとして利用されていた。1924（大正13）年に九州鉄道による福岡～久留米間の電気軌道が開業し、「大橋駅」が誕生した。



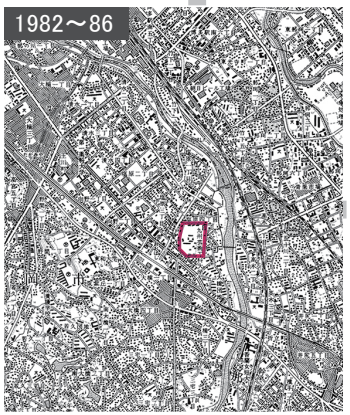
1927（昭和2）年に福岡県筑紫中学校（後の筑紫丘高校）が開校した。



大橋駅南側の高宮通り（福岡県道31号福岡筑紫野線）が現在の形に整備される。

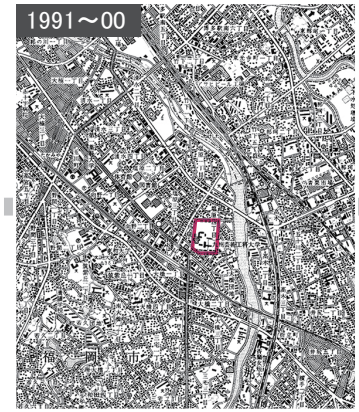


福岡市人口の急増とともに、大橋地区は急速に市街化が進行した。1968（昭和43）年に九州芸術工科大学が開校した。



時系列地形図閲覧サイト
「今昔マップ on the web」より

1985（昭和60）年、大橋駅南側に大橋ショッピングモールが完成した。



福岡市の人口増とともに、市街化がさらに進行した。



大橋キャンパスの北東約800mの福岡青果市場跡地において、2022（令和4）年に予定されている大型商業施設の開業に伴い、さらに大橋地区周辺の様子や人の流れが変わってくることが予想される。

（図2-3）立地環境の変遷

2-2

2-2 大橋キャンパスの概要

2-2-1 大橋キャンパスにおける組織の概要

大橋キャンパスは、以下に示す学府・研究院・学部・附置研究所および学内共同利用施設により構成されている(図 2-4)。

学府	芸術工学府	
研究院	芸術工学研究院	附属応用知覚科学研究センター 附属応用生理人類学研究センター 附属環境設計グローバル・ハブ 附属SDGsデザインユニット 附属社会包摂デザイン・イニシアティブ
学部	芸術工学部	
研究センター	学内共同教育研究センター	未来デザイン学センター グローバルイノベーションセンター ユヌス＆椎木ソーシャル・ビジネス研究センター キャンパスライフ・健康支援センター(大橋地区分室)
附属図書館	芸術工学図書館	

(図2-4)大橋キャンパスにおける組織の概要　2021(令和3)年4月

2-2-2 大橋キャンパスの基本情報

2021(令和3)年5月1日現在

所在地	福岡県福岡市南区大橋塩原 4 丁目 9-1
標高	9.3m
高低差	0.5m
緯度	33 度 33 分 23 秒
経度	130 度 25 分 53 秒
敷地面積	52,814 ㎡
建築面積	14,596 ㎡
延床面積	41,271 ㎡
人口(現員)	1,506 人(学生数 1,303 人、教員 94 人、その他職員等 109 人)



(写真2-5)大橋キャンパス

Google Earth ©2021 ZENRIN

2-2-3　大橋キャンパスにおける組織のあゆみ

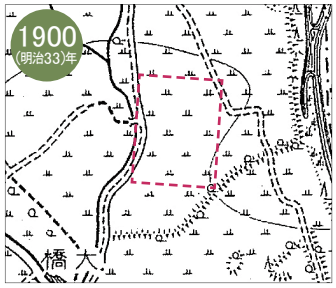
1963（昭和 38）年、国立九州芸術大学設置期成会が創立され、1968（昭和 43）年に九州芸術工科大学が開設した。2003（平成 15）年、九州大学との結合後も、組織再編や研究院・学府・学部の改組、新たな施設の導入などを経て現在に至る（図 2-5）。

		<周辺環境>
1963（昭和38）年2月	国立九州芸術大学設置期成会創立	
1966（昭和41）年10月	国立産業芸術大学（仮称）設立準備会創立	
1967（昭和42）年6月	九州芸術工科大学創設準備室設置	
1968（昭和43）年4月	九州芸術工科大学（芸術工学部）開設	南市民プール開館 [1976（昭和51）年]
	環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科および音響設計学科の４学科設置	大橋駅が高架新線建設にともない現在地へ移転　急行停車駅となる 大橋西鉄名店街開業 南市民センター開館 [1978（昭和53）年]
1972（昭和47）年4月	芸術工学専攻科設置	
1977（昭和52）年4月	芸術工学専攻科廃止	
5月	大学院芸術工学研究科（修士課程）設置	南体育館開館 [1982（昭和57）年]
	生活環境専攻および情報伝達専攻の2専攻設置	障がい者スポーツセンター（さん・さんプラザ開館） [1984（昭和59）年]
1980（昭和55）年4月	保健管理センター設置	
1986（昭和61）年4月	環境設計学科および画像設計学科の2学科を改組（大講座制導入）	大橋ショッピングモール完成 [1985（昭和60）年]
1988（昭和63）年4月	工業設計学科および音響設計学科の2学科を改組（大講座制導入）	
1993（平成05）年4月	大学院芸術工学研究科（博士課程）設置	男女共同参画推進センター（アミカス）開館 [1988（昭和63）年]
	生活環境専攻および情報伝達専攻の2専攻設置	塩原地区土地区画整理事業終了 [1991（平成03）年]
1997（平成09）年4月	環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科および音響設計学科の4学科を環境設計学科、	
	工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科および芸術情報設計学科に改組（3大講座制導入）	
	地域共同研究センター設置	
2001（平成13）年4月	大学院芸術工学研究科を芸術工学専攻の1専攻に改組	大橋音楽・演劇練習場（ゆめアール大橋）開設 おおはし子どもプラザ開館 [2005（平成17）年]
2003（平成15）年10月	九州大学と結合	
	九州大学大学院芸術工学研究院・大学院芸術工学府・芸術工学部設置	福岡市都市高速道路５号線野多目～堤間開通 [2006（平成18）年]
2006（平成18）年4月	大学院芸術工学府にデザインストラテジー専攻設置	
2008（平成20）年4月	大学院芸術工学府にデザインストラテジー専攻（博士後期課程）設置	
	大学院芸術工学府芸術工学専攻を再編（コース制の導入） 【デザイン人間科学コース、コミュニケーションデザイン科学コース、環境・遺産デザインコース、コンテンツ・クリエーティブデザインコース】	
2009（平成21）年7月	大学院芸術工学研究院を改組 【環境計画部門、人間生活システム部門、資格情報部門、音響部門、芸術情報部門、応用情報部門を、デザイン人間科学部門、コミュニケーションデザイン科学部門、環境・遺産デザイン部門、コンテンツ・クリエーティブデザイン部門、デザインストラテジー部門の5部門へ改組】	
2010（平成22）年4月	大学院芸術工学府芸術工学専攻にデザイン人間科学国際コースを設置	
2013（平成25）年4月	大学院芸術工学研究院の内部組織として、応用知覚科学研究センターを設置	竹下駅西口広場完成 [2013（平成25）年]
10月	大学院芸術工学研究院を改組（講座制の導入）	
	環境・遺産デザイン部門を環境デザイン部門に改組し、計17講座を設置	
2014（平成26）年8月	大学院芸術工学研究院の内部組織として、応用生理人類学研究センターを設置	
2015（平成27）年4月	大学院芸術工学研究院の内部組織として、ソーシャルアートラボを設置	
2017（平成29）年4月	大学院芸術工学研究院の内部組織として、環境設計グローバル・ハブを設置	
2018（平成30）年6月	芸術工学部50周年	
2020（令和02）年4月	芸術工学部を芸術工学科の1学科に改組 【環境設計コース、インダストリアルデザインコース、未来構想デザインコース、メディアデザインコース、音響設計コースの5コースを設置】	大橋サテライト閉鎖 [2019（平成31）年]

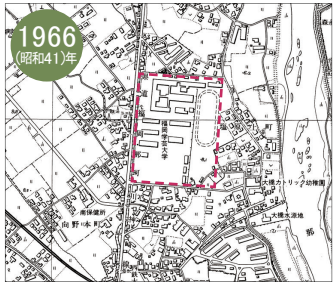
（図2-5）大橋キャンパスにおける組織のあゆみ

2-2-4　キャンパス空間の変容

1900（明治 33）年の地形図を見ると、周辺一帯、田んぼとして利用されていた。1966（昭和 41）年には市街化が進み、福岡学芸大学時の建物が配置されている。1969（昭和 44）年から本キャンパスの整備が開始され、1990（平成 2）年には、現在も継承される求心的な方形が対角線上に連なる構成の建物配置がなされている（図 2-6）。



出典：「1：10000地形図」s1665-1900国土地理院



出典：「1：5000国土基本図」2-HC-96国土地理院



出典：「1：10000地形図」福岡11-2-3 国土地理院

（図2-6）キャンパス空間の変遷

【写真で見る大橋キャンパスの歴史】



1963（昭和38）年頃



1980（昭和55）年～1982（昭和57）年頃



1990（平成2）年～1992（平成4）年頃



1999（平成11）年～2003（平成15）年頃

（写真2-6）写真で見る大橋キャンパスの歴史

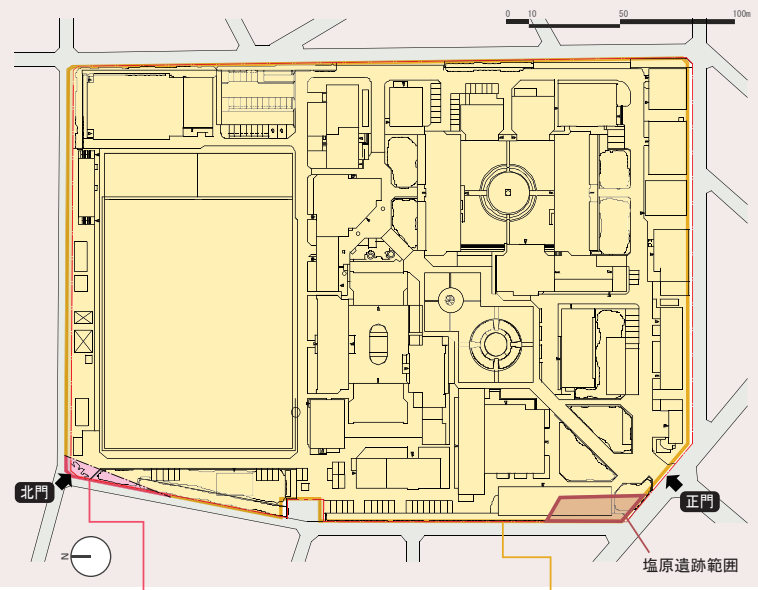
2-3

2-3 キャンパスの計画と整備における関連法規

大橋キャンパスは、福岡空港に近接するとともに、内部に歴史資源を包蔵することから、キャンパスの計画と整備においてはこれらに関連する法規を尊守する必要がある。

(1)都市計画法による用途地域・建ぺい率、容積率

指定された用途地域の建ぺい率の上限(80%または60%)に対し、現在の建ぺい率(キャンパス全体)は28%である。また、容積率の上限(300%または200%)に対し、現在の容積率は78%であるため、十分な余裕があると言える(図2-7)。



(図2-7)大橋キャンパスにかかる制限など

区分地域	市街化区域
用途地域	近隣商業地域
建ぺい率	80%
容積率	300%
高度地区	–

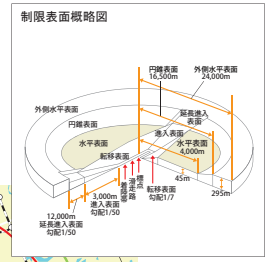
区分地域	市街化区域
用途地域	第一種住居地域
建ぺい率	60%
容積率	200%
高度地区	第二種20m高度地区

(2)埋蔵文化財保護法

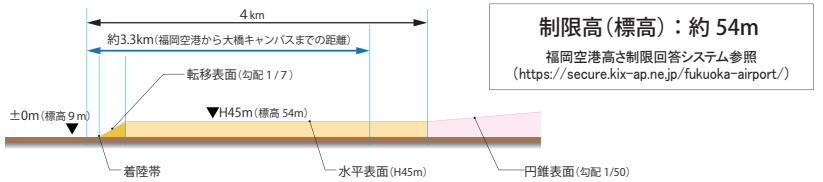
大橋キャンパスは南西の一部に遺跡(塩原遺跡)を包蔵することから、埋蔵文化財保護法による埋蔵文化財包蔵地に指定されており、施設建設にあたっては、埋蔵文化財調査や慎重な工事が求められる。また、包蔵地外において工事を行う際も、近隣で遺跡が発見されるなど、文化財保護法96条(不時発見)に係る要件があるため、福岡市教育委員会による立会のもと、遺跡の有無の確認を行う必要がある。

(3)航空法による高さ制限

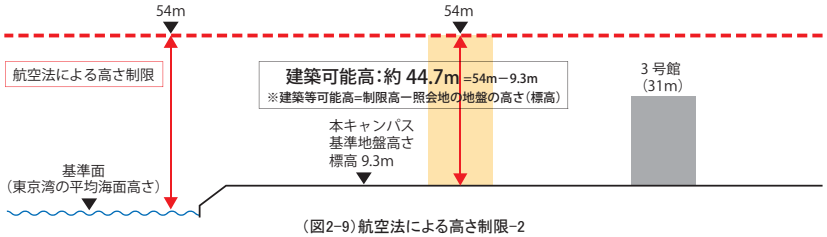
大橋キャンパスは、福岡空港より約3.4kmの距離に位置し、利便性に優れる半面、建物や植物などについて、設置・植栽・留置する高さの制限を受けている。大橋キャンパスは、図2-8に示す水平表面内にあり、制限高さは44.7mとなっている。大橋キャンパス内で最も高層の3号館の高さは31mであり、制限高さを下回っている。







(図2-8)航空法による高さ制限-1



(図2-9)航空法による高さ制限-2

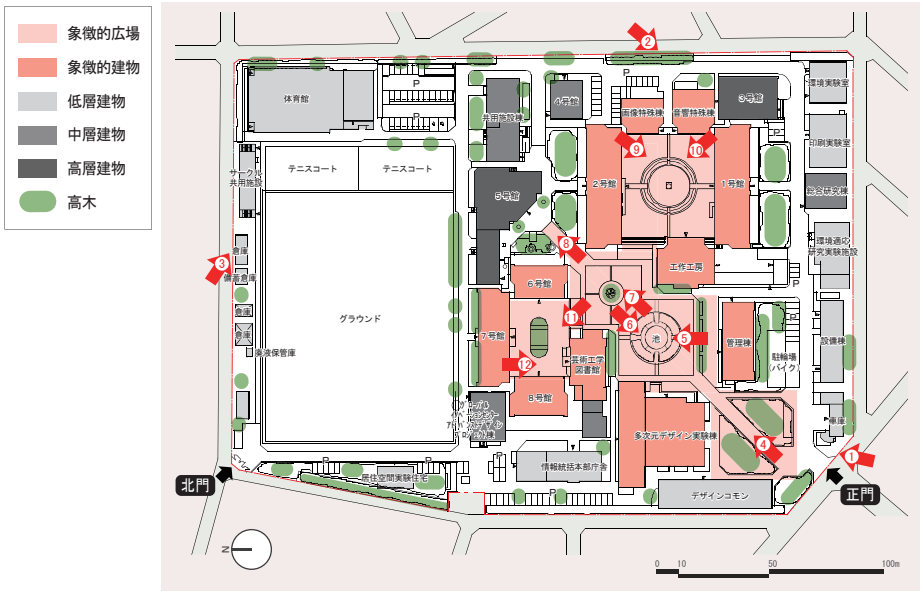
2-4

2-4 キャンパスの現状と課題

2-4-1　ランドスケープ

現状 キャンパスと周辺地域との境界部には、概ね中低層の建物が建ち並び、一部で高木が植栽されている。内部は、対角線上に求心的な方形の中庭が連なり、大橋キャンパスを特徴づける構成となっている。特に 1 号館、2 号館とその間のフライパン広場は象徴的であり、創設当初から継承される建物が各広場を取り囲んでいる。キャンパスの自然環境として、植栽された樹木が 50 年もの間に成長し、主に内部の歩行空間に生い茂っている（図 2-10、写真 2-7①～⑫）。

課題 周辺との境界部において、視線遮蔽や落葉の問題など周辺地域との観点から、樹木の在り方や建物高さなどの検討が必要である。また、学科の増加などによる施設の整備がなされた結果、当初の連続するオープンスペースと施設配置の考え方は薄れてきている。50 年にわたり継承されてきた空間構成と意匠を将来へ守り伝えるため、象徴的空間や資源を活かした整備計画が必要である。



（図2–10）象徴的空間・資源の分布


①正門周辺境界部


②東側境界部


③北側境界部


④保存緑地プロムナード


⑤池（噴水広場）


⑥噴水広場


⑦芸術工学図書館横


⑧5号館前


⑨1 号館（フライパン広場）


⑩2号館


⑪7 号館前広場

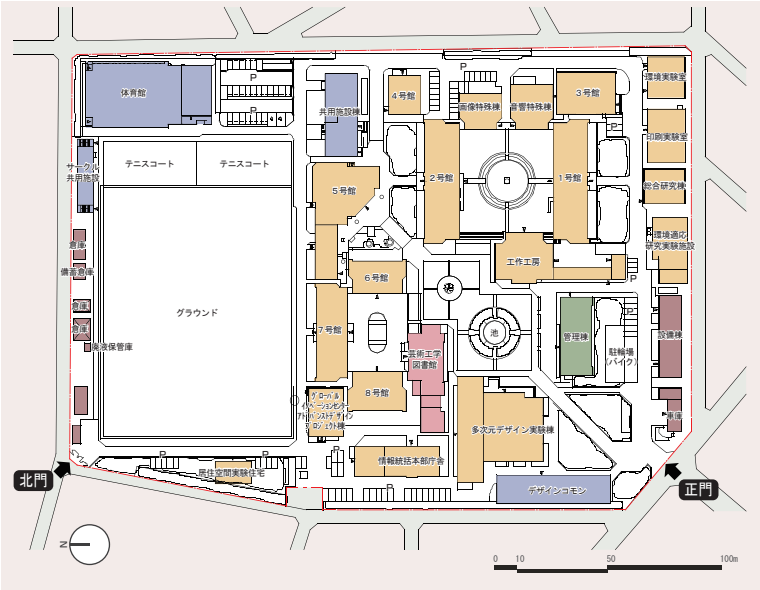

⑫芸術工学図書館

（写真2–7）

2-4-2　建物用途および配置

現状 5つの用途の建物があり、主に東側に教育・研究施設が立地し、中央部に図書館が位置している。福利施設、課外活動施設等の支援施設は、主に北東と南西の境界部に位置している。正門近くに設置された飲食機能を有するデザインコモンが都市に開かれた大学として新たな交流拠点として活用されている（図 2-11）。

課題 都市に開かれた大学として、学外と連携する機能の充実を図る必要がある。また、研究領域の拡大、複合化に対応するため、図書館と情報統括本部庁舎など、機能が類似する施設等の連携を図っていく必要がある。



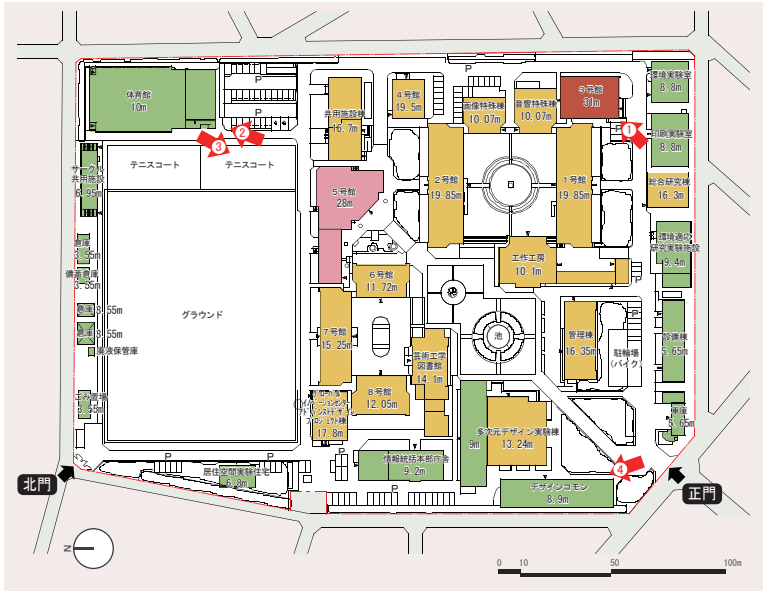
（図2-11）建物の用途と配置

【建物用途別】
- 教育・研究施設
- 図書館
- 支援施設（福利施設、課外活動施設等）
- 管理施設
- 施設設備等

2-4-3　建物高さ

現状 創設時当初の 1 号館、2 号館の高さに合わせ中層の建物が大部分を占める。最も高い建物は 31m の 3 号館であり、続いて高い 5 号館とともに、周辺建物より突出している（図 2-12、写真 2-8①～④）。

課題 象徴的空間のプロポーションや、周辺地域の景観との調和を考慮し建物高さを決定する必要がある。また、学生と教職員の増加、教育・研究環境の充実などにより建物の更新や新設を行う場合は、中層を中心とした既存景観との調和を図る必要がある。



【建物高さ】
- 0～10m
- ～20m
- ～30m
- ～40m

（図2-12）建物高さの分布


①3号館


②体育館


③5 号館


④デザインコモン

（写真2-8）

2-4-4　キャンパスの境界

現状 キャンパス周辺は、柵や植栽帯で囲われており、西側を除き隣接道路との間に高低差があることから、来訪者が出入りできるのは、正門、北門の２箇所である。北東境界部に接する道路とキャンパスの敷地に 1m ほどの高低差がある（図 2-11、写真 2-9①～⑪）。

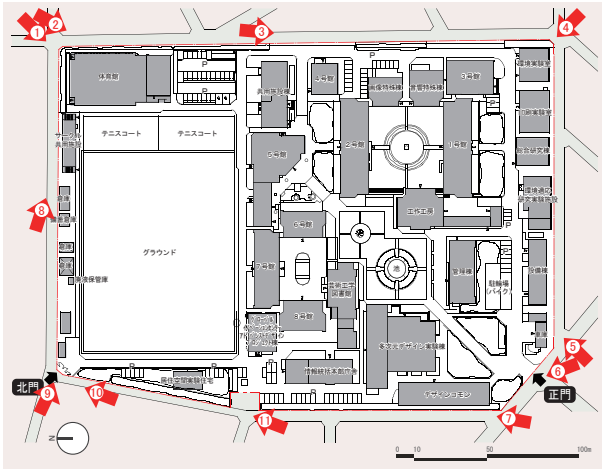
課題 高低差により、周辺地域との間に隔たりがある。学内外の人々がデザイン文化に容易にアクセスでき、交流の場となるキャンパスを目指すにあたり、外周部のゾーニングや周辺地域との連携を図りながら改修の計画を行う必要がある。


①北東境界部


②北東境界部


③東境界部


④南東境界部



（図2-11）キャンパスの境界部の状況


⑤南西境界部


⑥正門


⑦南西境界部


⑧北境界部


⑨北門


⑩北西境界部

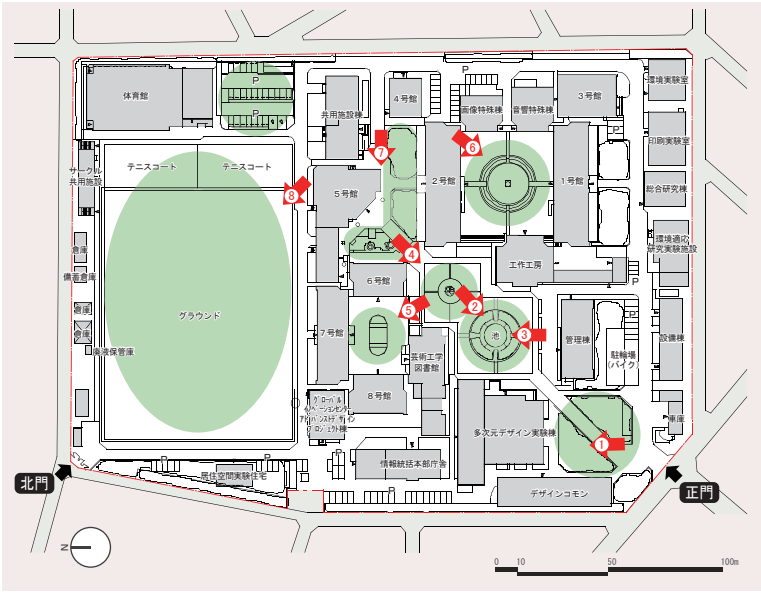

⑪西境界部

（写真2-9）

2-4-5　オープンスペース（広場等）

現状 50年にわたり継承してきたフライパン広場や噴水広場は、学園祭のイベント等にも利用されている。キャンパスのおよそ４分の１を占めるグランドの利用率は低い（図2-14、写真2-10①～⑧）。

課題 5号館によって途切れている正門から北東へ伸びる軸線について、北東側オープンスペースとの結びつけ方を検討する必要がある。また、グラウンドを含む厚生棟部分の利用方針や、研究動向を踏まえた新規施設の設置、学内外の組織と連携した拠点としての視点から整備を検討する必要がある。



（図2-14）オープンスペース（広場等）の分布


①デザインコモン前


②多次元デザイン実験棟前


③噴水


④芸術工学図書館横


⑤7号館前


⑥フライパン広場


⑦5号館前


⑧グラウンド

（写真2-10）

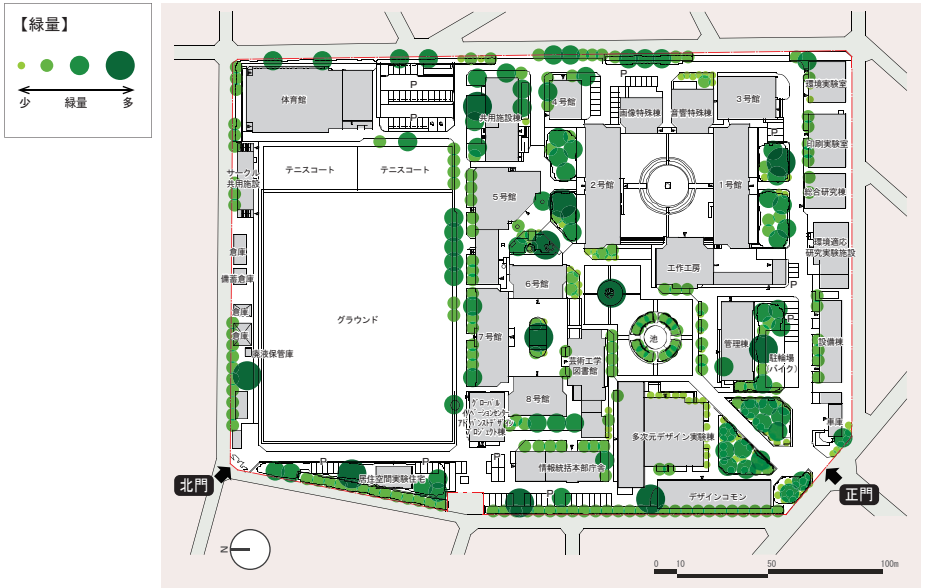
2-4

2-4-6　緑地

（1）緑被率

現状 キャンパス内は広場、建物沿い、敷地境界を中心に植栽されている。デザインコモン前や5号館前は、高木が多く植えられており緑量が多く、キャンパス内の道路沿いや敷地境界部には中木や低木が連続している。緑被率は、敷地面積に対して約22%であり、一人当たりの緑地面積は約7.6㎡である（図2-13）。

課題 踏圧と日影による林床の裸地化が見られることから、高木の整備による林内照度の向上をはじめ、植え込みによる動線の整備や草本、低木等の充実化を図っていく必要がある。



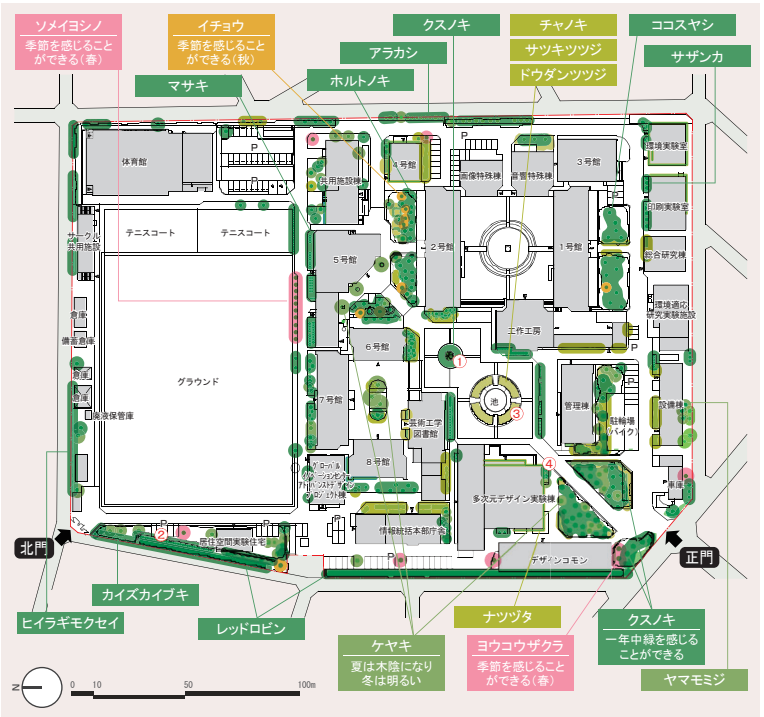
敷地面積に対する緑被率	約 22%	一人当たりの緑地面積	約 7.6 ㎡
大橋キャンパス52,814㎡に対し、緑地面積は11,452㎡である。		1,506人に対し、約11,452㎡の緑地面積を保有する。	

（図2-13）緑の分布

（2）樹種

現状 正門や広場中央部にクスノキ、ケヤキ等の高木や、サツキツツジ、チャノキ等の円形型の低木が植えられており、象徴的な空間となっている。外部との境界部には、レッドロビン、サザンカ等の中木が多く植えられている。また、外壁にナツヅタが植生している箇所も多くあり、建物に個性を与えている（図2-14、写真2-11①～④）。

課題 主に景観的な視点からの植栽であり、地域の生物多様性に寄与する空間づくり、学生生活の快適性、キャンパスの美観向上、学生の教育に資するランドスケープデザインなど緑地の多様な視点からの緑化を検討する必要がある。



（図2-14）樹種および分布



①クスノキ　②カイヅカイブキ　③チャノキ/サツキツツジ/ドウダンツツジ　④ナツヅタ

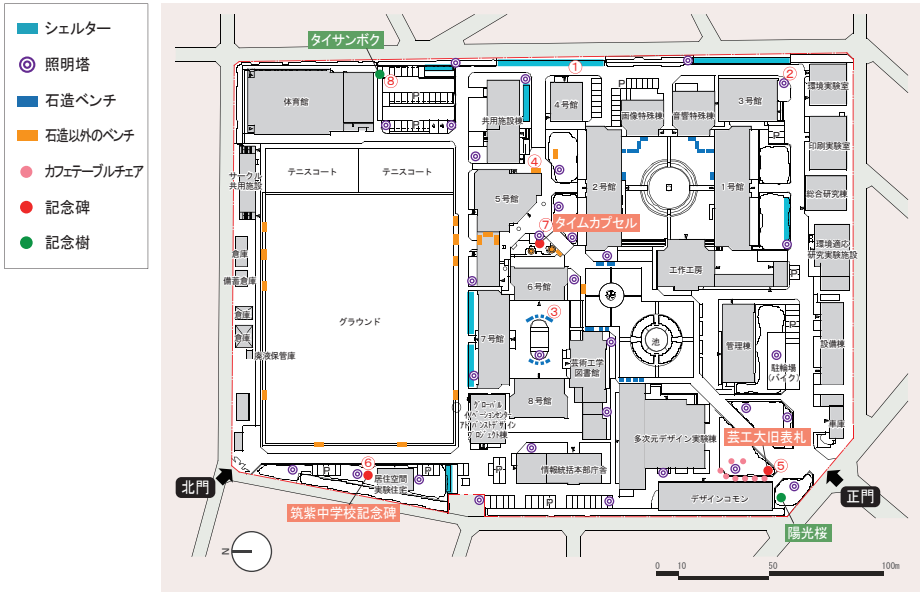
（写真2-11）

2-4

2-4-7　ストリートファニチャー

現状 キャンパスを利用するうえで必要な駐輪場シェルターや照明塔、休憩行為を誘発するベンチなど、大小様々な要素がある。また、芸術工科大学時代の表札やタイムカプセル等、大橋キャンパスの軌跡をたどることができる記念碑、記念樹等が点在している。(図 2-15、写真 2-12①～⑧)。

課題 同じ役割をもつ要素の中でも、デザインや劣化度合等に違いが見られる。計画的にメンテナンスを行うとともに、キャンパス空間の区分を意識した配置とデザインを検討し、利用者が快適に過ごすために必要となる要素を整理し整備する必要がある。



(図2-15)記念碑・記念樹等の分布

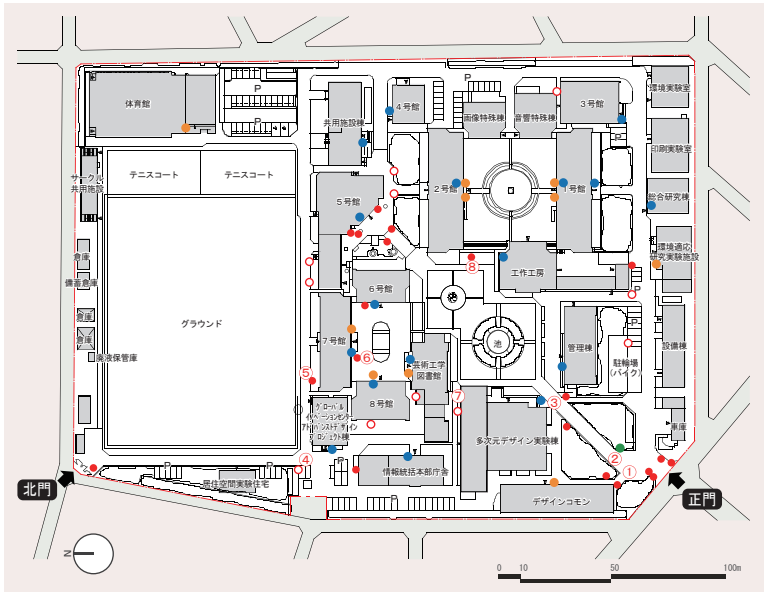


(写真2-12)

2-4-8　サイン

現状 正門付近に大型の施設案内サインがあり、各建物の入口壁面にも号館の表示と併せて中型の施設案内サインが設置されている。また、キャンパス内各地に、駐輪や喫煙等に関する禁止標識が設置されている(図 2-16、写真 2-13①～⑧)。

課題 各建物の号館表示が控えめで、来館者にはわかりにくいところがある。また、特に正門付近に禁止標識が点在しており、大学名や施設案内サインよりも目立ち分かりにくいため、設置する種類の整理やデザインの見直しなど、キャンパス全体で統一されたわかりやすい整備が必要がある。



(図2-16)サインの分布



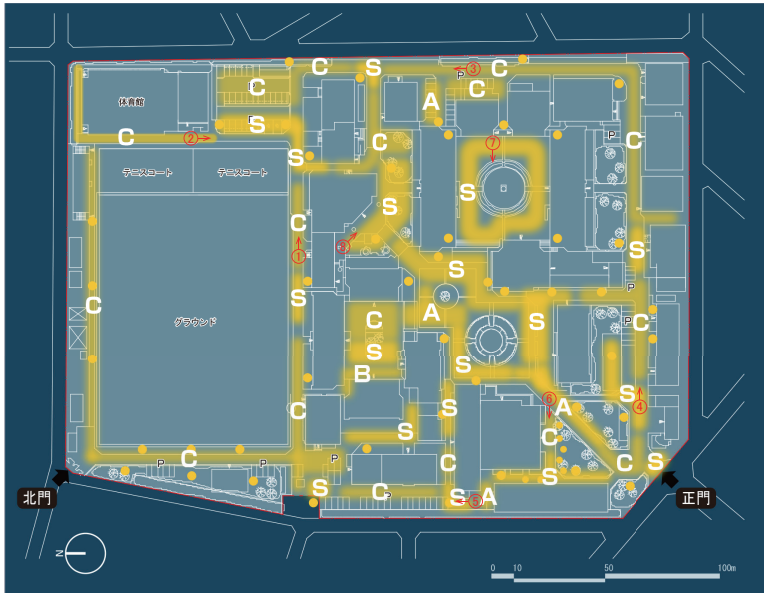
(写真2-13)

2-4-9　光環境

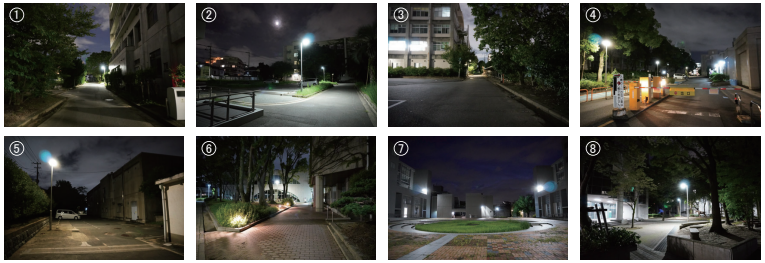
現状 歩車道に沿ってポールライトが設置されており、広場には、部分的に照度の高い壁付け屋外灯が設置されている。周囲が住宅地であり、比較的明るい環境にもあることから、現在キャンパス内で照度不足と感じられる場所はない（図 2-17、写真 2-14①～⑧）。

課題 デザインコモン前に連続するガーデンライトなど趣を感じられる場所もあるが、ほとんどがポールライトによる単調な光である。そのため、キャンパスの魅力を引き立てる演出も検討する必要がある。

S: とても明るい
6Lx以上
A: 日本防犯協会の定めるクラスA
5Lx
B: 日本防犯協会の定めるクラスB
3～4Lx
C: 上記より暗いまたは明るさにムラがある



（図2-17）照度分布



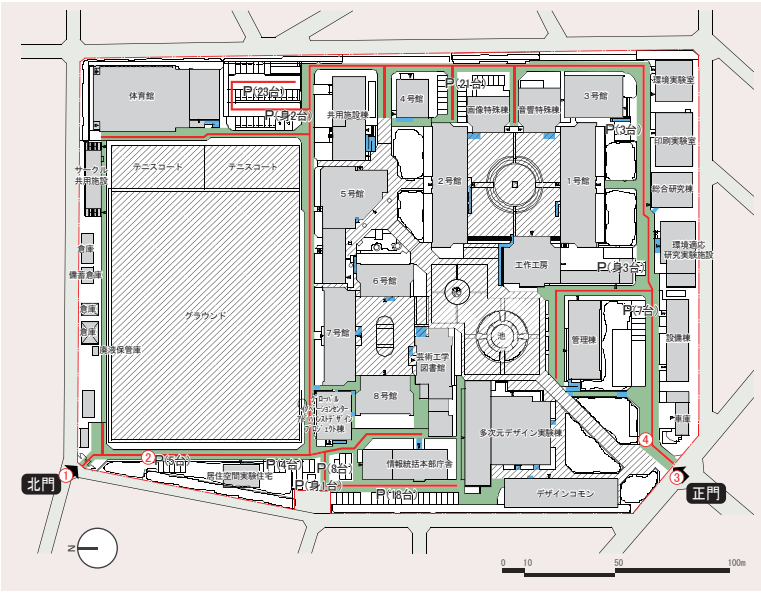
（写真2-14）

2-4-10　交通動線

（1）エントランス・キャンパス内動線

現状 正門が車輌と歩行者等の主要な出入口となっており、北門については、通り抜け防止等の対策のため、学内関係者に限り、歩行者および自転車の利用が可能となっている。また、緊急時の対策として、定期的に行う防災訓練において、正門、北門ともに開け放ち、緊急車両到着に備えている（図 2-18、写真 2-15①～④）。

課題 歩行者と車輌が重複する動線のうち、特に変則的な交差点において、事故の危険性を考慮した整備を検討する必要がある。



（図2-18）手段別の動線



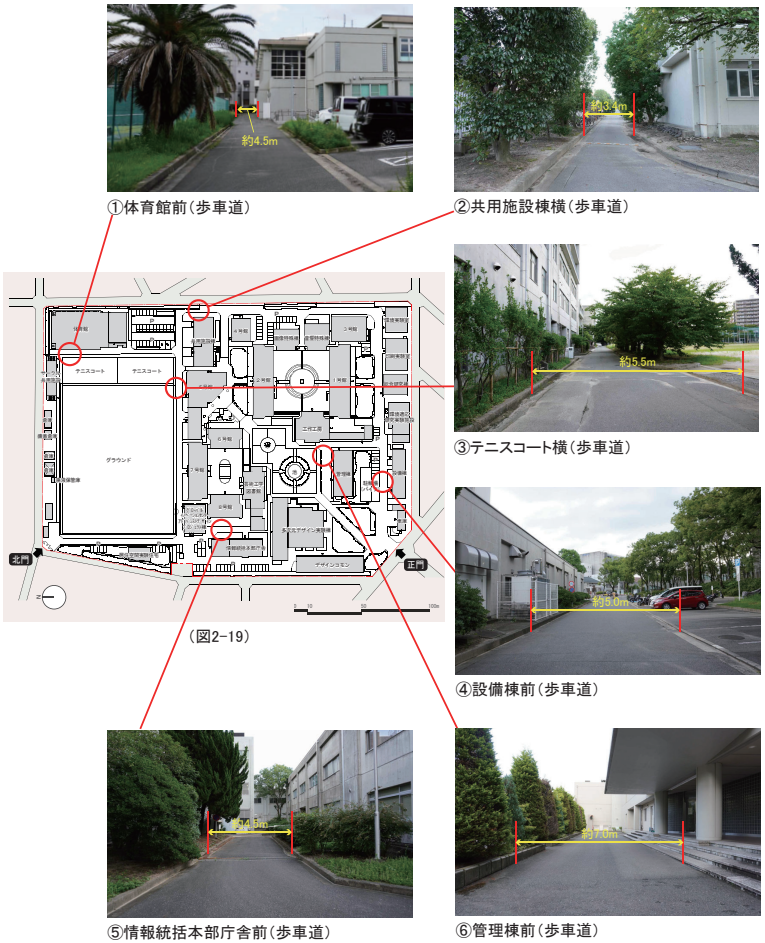
①北門　②北門からの歩車道　③正門　④正門からの歩車道

（写真2-15）

（2）幅員

現状 歩車道において、一部で 3.4m とやや狭い場所もあるが、その他は 4.5m 以上の幅員を確保している（図 2-19、写真 2-16①～⑥）。

課題 歩道と車道の分離がなされていないため、安全・安心に配慮した整備を行う必要がある。



①体育館前（歩車道）
②共用施設棟横（歩車道）
③テニスコート横（歩車道）
④設備棟前（歩車道）
⑤情報統括本部庁舎前（歩車道）
⑥管理棟前（歩車道）

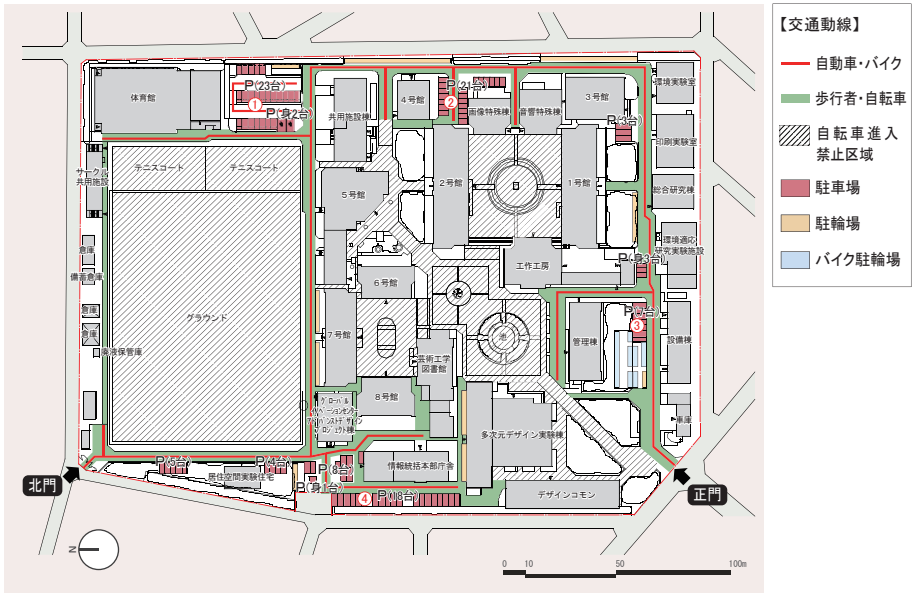
（図2-19）

（写真2-16）既存道路の幅員および構成

2-4-11　駐車場

現状 キャンパス全体で、収容台数が合計 95 台（うち身障者用 6 台）の駐車場が、分散して立地している（図 2-20、写真 2-17①～④）。2 号館東側、3 号館西側、情報統括本部庁舎北側の駐車場は、収容分の台数が駐車されることが多い傾向にある。その他は、割合としておおよそ半分から 9 割近くの駐車が見られ、一方で北門に近接した駐車場は、利用率が低い傾向にある。

課題 体育館横や画像特殊棟裏の駐車場に対する東側からのアプローチの可能性や、利用状況に基づく収容台数の見直しなどを継続的に検討する。



（図2-20）駐車場の配置



①体育館前
②画像特殊棟裏
③設備棟前
④情報統括本部庁舎裏

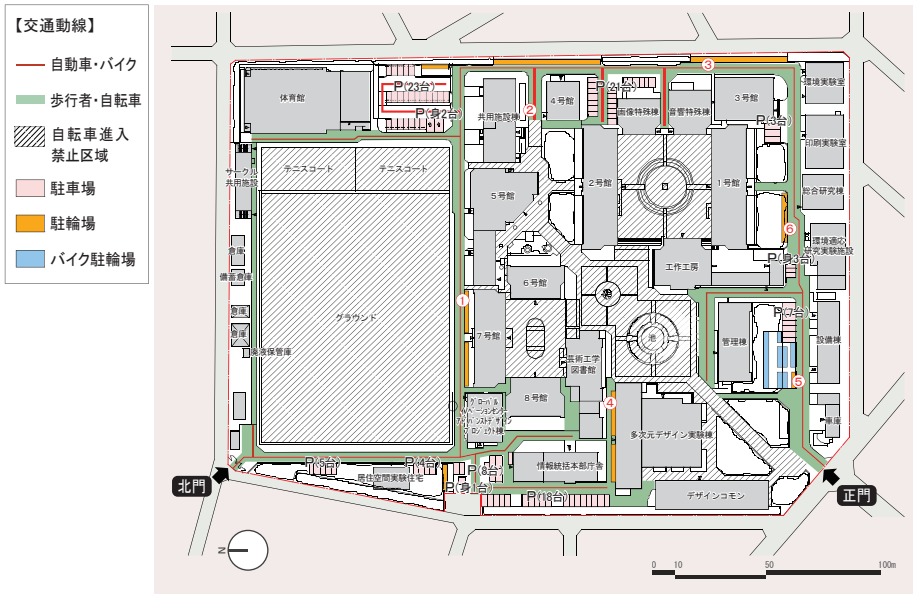
（写真2-17）駐車場の写真

2-4

2-4-12　駐輪場

現状 キャンパス内に分散配置し、東側の敷地境界付近に広く確保している。また、デザインコモン外来者用として、正門から入り右方向に専用駐輪場を設けている（図 2-21、写真 2-18①～⑥）。

課題 利便性の良い、多次元実験棟と図書館の間のスペース等の駐車禁止のエリアでの駐輪が目立ち、通路幅を狭めている。



（図2-21）駐輪場の配置


①7号館前


②共用施設棟前


③3号館横


④多次元デザイン実験棟裏


⑤設備棟前（デザインコモン外来者用）

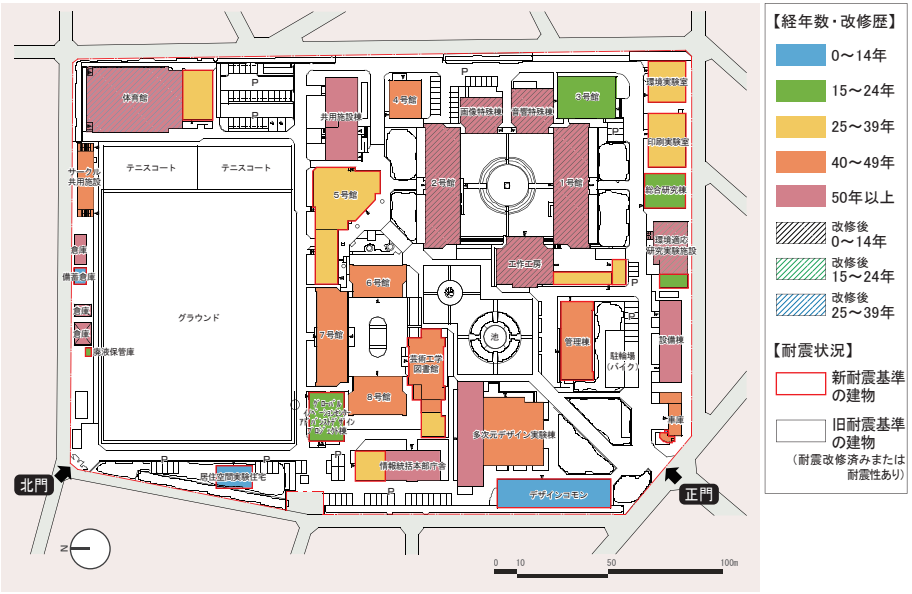

⑥1号館前

（写真2-18）

2-4-13　建物の経年および耐震性能

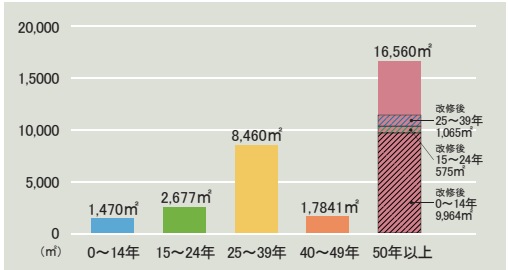
現状 経年数 50 年以上の施設を 16,560 ㎡（保有延べ床面積の約 40%）保有しており、そのうち 11,604 ㎡（約 70%）の建物が改修済みである。そのうち、フライパン広場を囲む 1 号館、2 号館、画像特殊棟、音響特殊棟、工作工房は、2014（平成 26）年から 2021（令和 3）年に大規模改修を終えている（図 2-22、2-23）。

課題 ほとんどの建物が耐震性を有することが確認されているが、老朽施設の維持管理・更新や大規模改修等の計画的な整備が必要である。



（図2-22）経年と耐震性能の分布

建物の経年状況



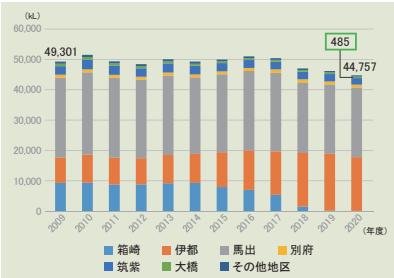
（図2-23）建物の経年状況

2-4-14　エネルギー消費量およびコスト

現状 大橋キャンパスの総エネルギーの稼働面積は、12 年前と比べ約 2 %増加し、総エネルギー量は約 40%削減されている。光熱水費は、九大全体の 1 %であり、そのうち電気使用量が 81%を占めている（図 2-26 ～ 28）。

課題 省エネルギー機器の計画的な導入・更新によるエネルギー削減が引き続き必要である。

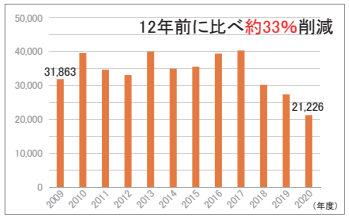
（1）2020（令和 2）年度の使用量



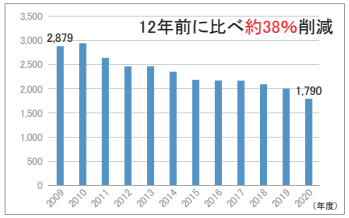
大学全体の総エネルギー量は2009年度に比べ
約6%の減少

大橋キャンパスの総エネルギー量は2009年度に比べ
稼働面積は**約2%の増加**
総エネルギー量は**約40%の削減**

（図2-24）大学全体の総エネルギー量　原油換算(kL)

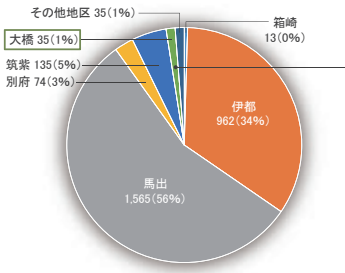


（図2-25）大橋キャンパスのガス使用量（㎥）



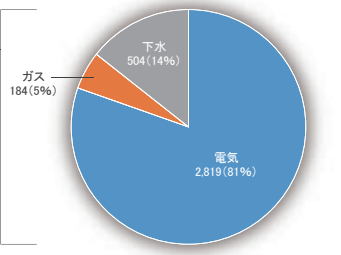
（図2-26）大橋キャンパスの電力使用量（kWh）

（2）コスト



大橋キャンパスの光熱水費は3千5百万円
九大全体の1%

（図2-27）キャンパス別光熱水料費（百万円）
[2020（令和2）年度]



大橋キャンパスの光熱水費は
電気が81%

（図2-28）大橋キャンパスの
エネルギー別光熱水料費（万円）
3千5百万円 内訳[2020（令和2）年度]

2-4-15　インフラストラクチャー

現状 電気、給水、通信（電話・EV インターホン、防災）配線、ガス配管に、更新の時期を過ぎている箇所が見られる。また、通信（情報ネットワーク）配線のほとんどが、本キャンパスマスタープランの対象期間中に更新時期を向かえる。さらに、排水配管はすでに更新時期を過ぎている箇所が多い（図 2-29 ～ 37）。

課題 ほとんどのインフラ設備の耐用年数は経年 15 年とされていることから、更新時期を迎えた配管の更新や、未曾有の大雨などの災害を考慮し、能力を検討したうえで、適切な整備を進める必要がある。



①給水管のへこみ

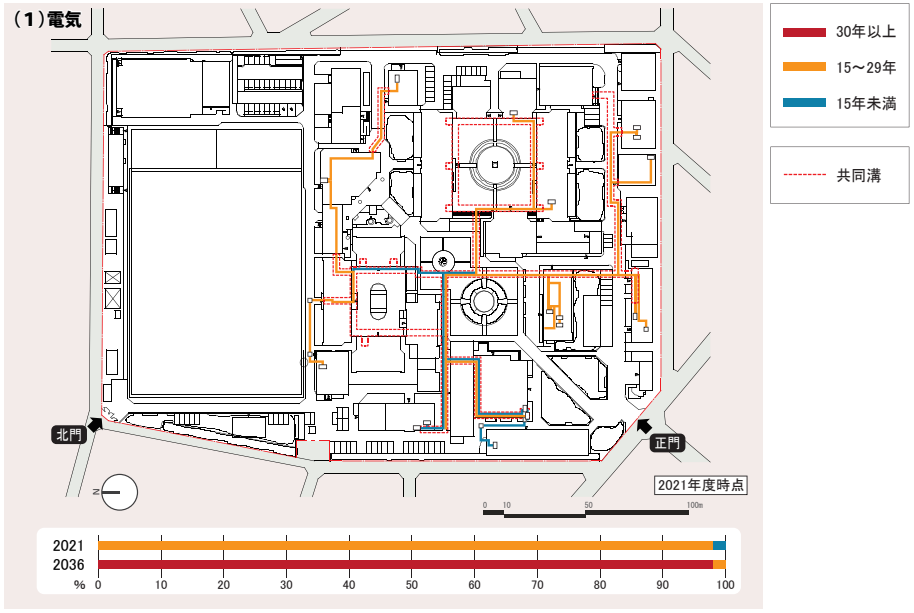


②配管に発錆



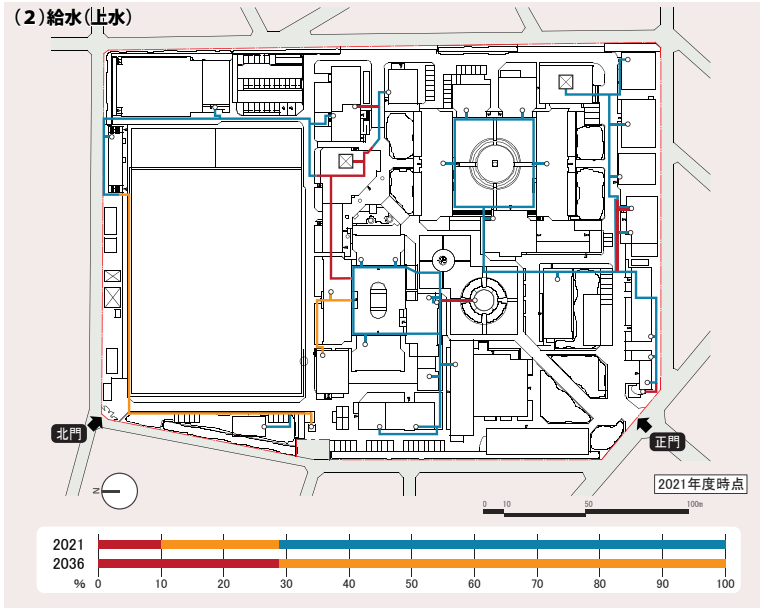
③竪樋の破損

（写真2-19）

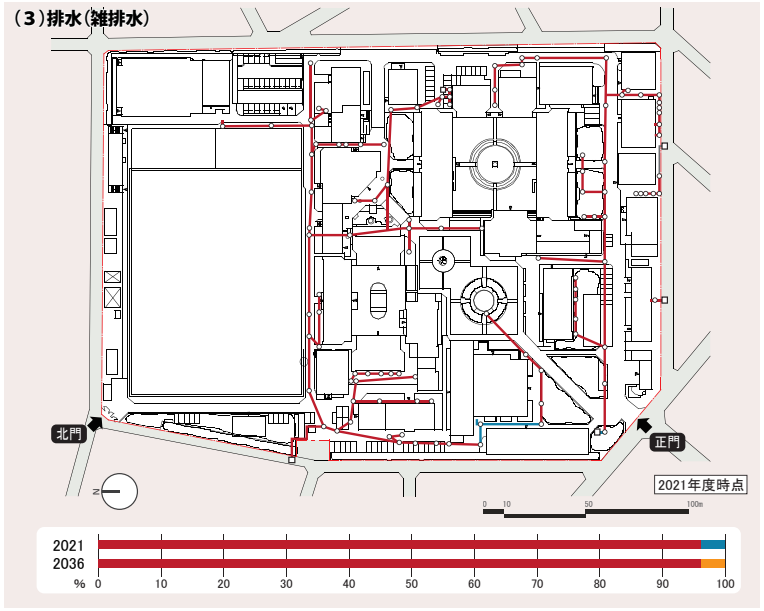


（図2-29）電気配線の経年状況

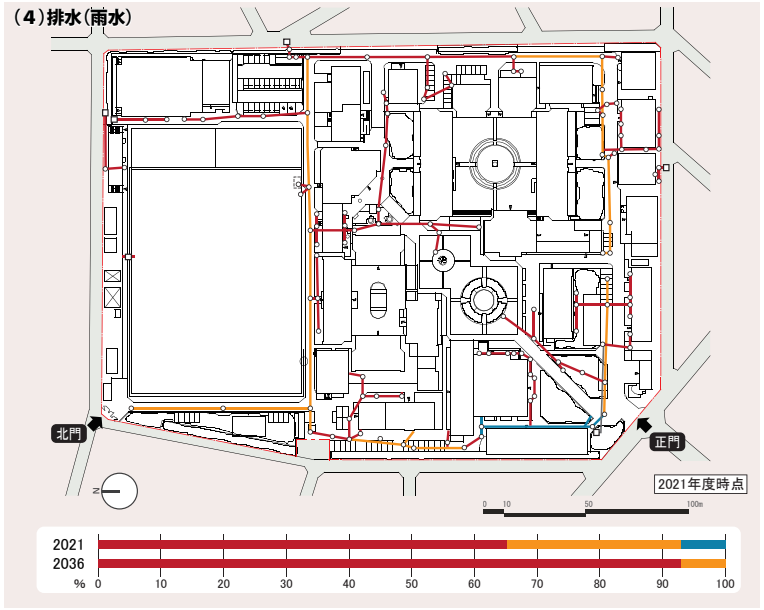
2-4



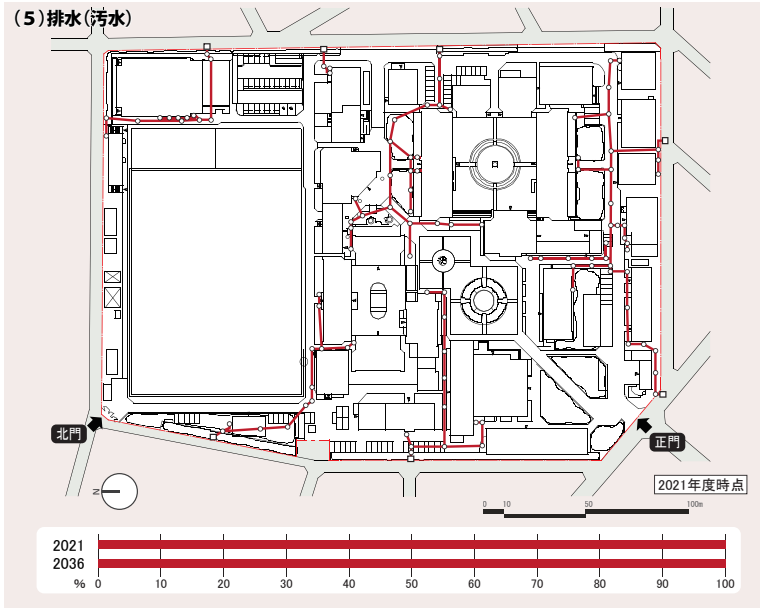
(図2-30)給水(上水)配管の経年状況



(図2-31)排水(雑排水)配管の経年状況

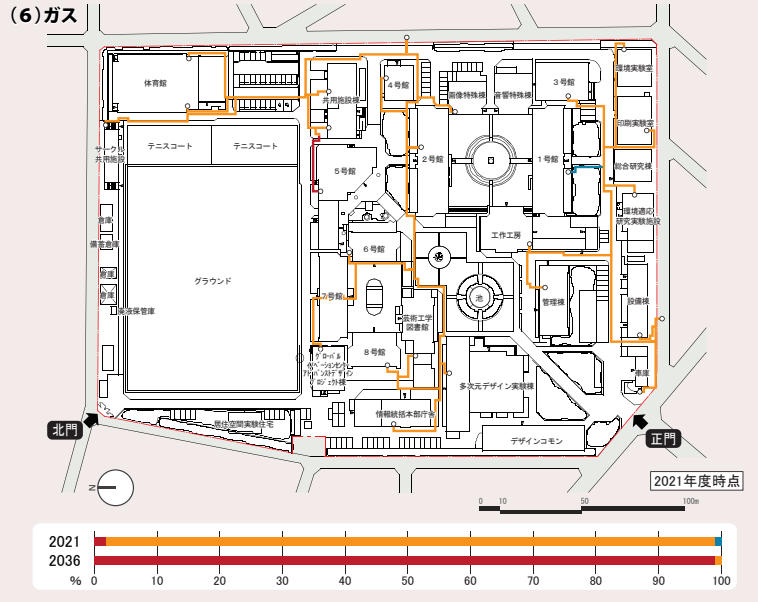


(図2-32)排水(雨水)配管の経年状況

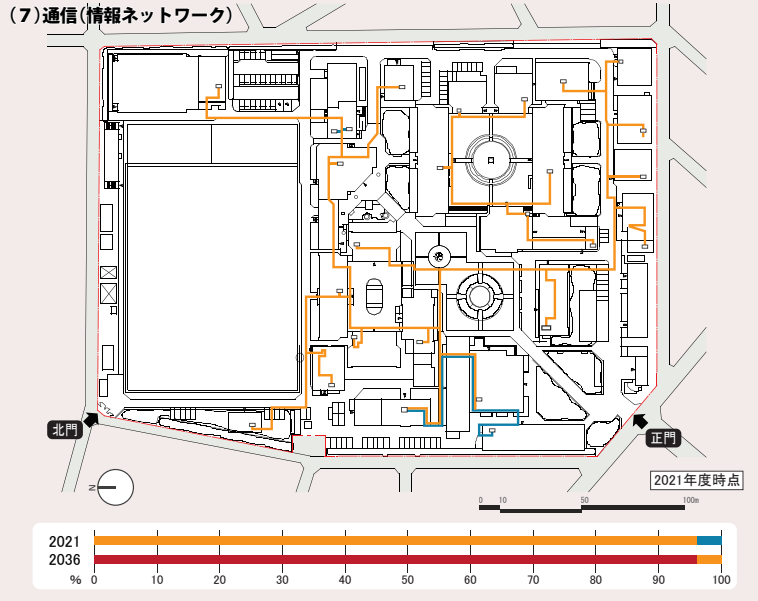


(図2-33)排水(汚水)配管の経年状況

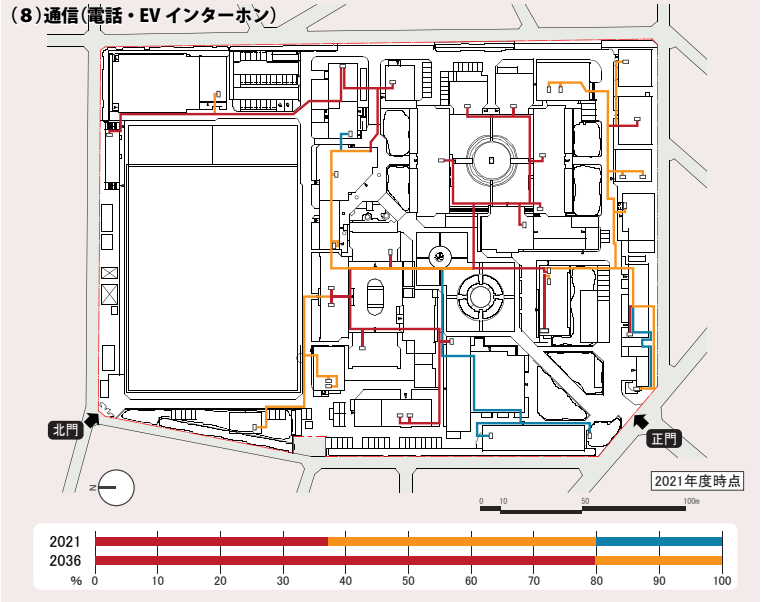
2-4



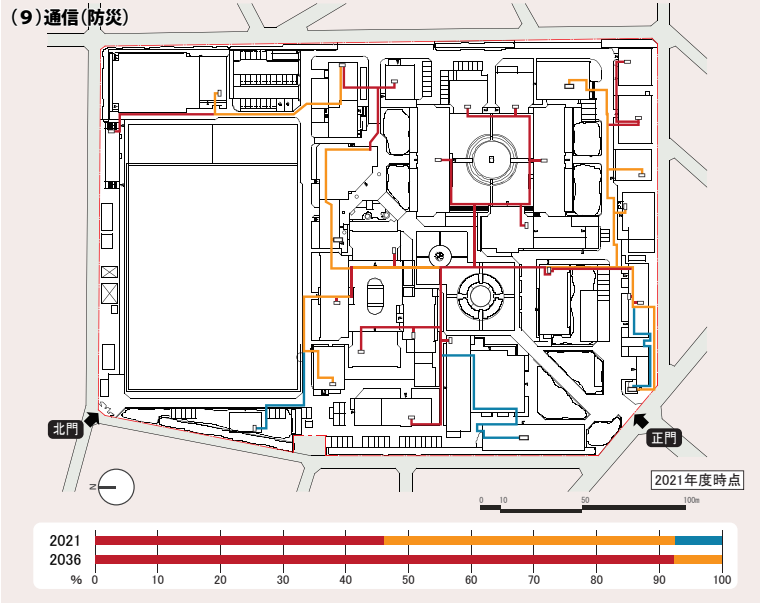
(図2-34)ガス配管の経年状況



(図2-35)通信(情報ネットワーク)配線の経年状況



(図2-36)通信(電話・EVインターホン) 配線の経年状況



(図2-37)通信(防災)配線の経年状況

KYUSHU University
OHASHI Campus Master Plan 2022

九州大学 大橋キャンパスマスタープラン 2022

第３章　マスタープラン

3

3-1　大橋キャンパスの骨格／計画の前提
3-2　全体計画
3-3　要素別計画

3-1 大橋キャンパスの骨格／計画の前提

計画および整備の方針

○既存キャンパスの骨格を形成している環境特性や構成要素を確認し、キャンパス空間の歴史性や個性を将来に継承する手がかりとする
○大橋キャンパスの目標像を実現するためのキャンパスの骨格を設定する
○歴史的な資源を維持・保全・活用し、人々の愛着と誇りを醸成する環境を整備する
○継承すべき空間と戦略的に活用を図る空間を設定する

大橋キャンパスは、1968（昭和 43）年の九州芸術工科大学開学当初は、福岡教育大学の施設がそのまま利用されており、1969（昭和 44）年から前校の九州芸術工科大学計画（マスタープラン）に基づき整備が開始された。

１つのオープンスペースを専門教育棟群、一般教養棟群それぞれが囲み、そのオープンスペースが連続する空間構造を、本キャンパスの、最も特徴的な空間構成として継承しつつ、九州大学における「先端的デザインの拠点」として、時代の変化に柔軟に対応できるキャンパスを構築する。計画を立案・実施していくうえでは、キャンパスの歴史、立地条件および周辺環境等を明確にし、将来に継承すべきものを認識する必要がある。 そのため、大橋地区フレームワークプラン 2009 およびその現時点での見直しを踏まえ、「自然環境」、「キャンパスの歴史的・空間的資源」、「周辺地域との接点」および「インフラストラクチャー」など、将来へ「継承すべきもの」について配慮事項を設定し、「キャンパスの骨格」を形成する要素別計画の前提条件とする。

（1）自然環境

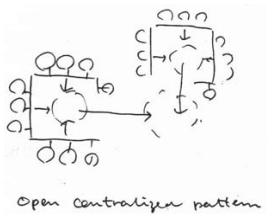
大橋キャンパスは地形に起伏がなく、現在の緑地は創設当初に植栽されたものである。しかし 50 年以上の間に成長した樹木はキャンパスの自然環境として定着している。そのため、これに加え、風向、日射などの自然環境特性を把握し、施設配置や活用の際に配慮した計画とする。

（2）キャンパスの歴史的・空間的資源

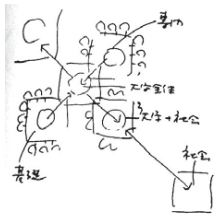
大橋キャンパスの配置計画の骨格は、求心的な方形の中庭が対角線上に連なる構成にある。今後の整備においても、中庭とその周囲の建物群のボリュームと意匠を維持しつつ、さまざまな活動・交流の場として中庭を位置付けていくことで、大橋キャンパスならではの空間構成を良好なかたちで継承する（コラム 3-1）。

（コラム 3-1）空間の基本的論理

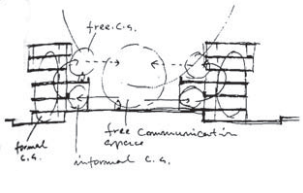
九州芸術工科大学計画（マスタープラン）は、「コミュニケーション空間の構成」を基本的論理としている。塀によって囲まれた閉じた空間ではなく、都市の諸施設と積極的に結びつき、外部に開かれたキャンパスとして考えている。



開いた集中型

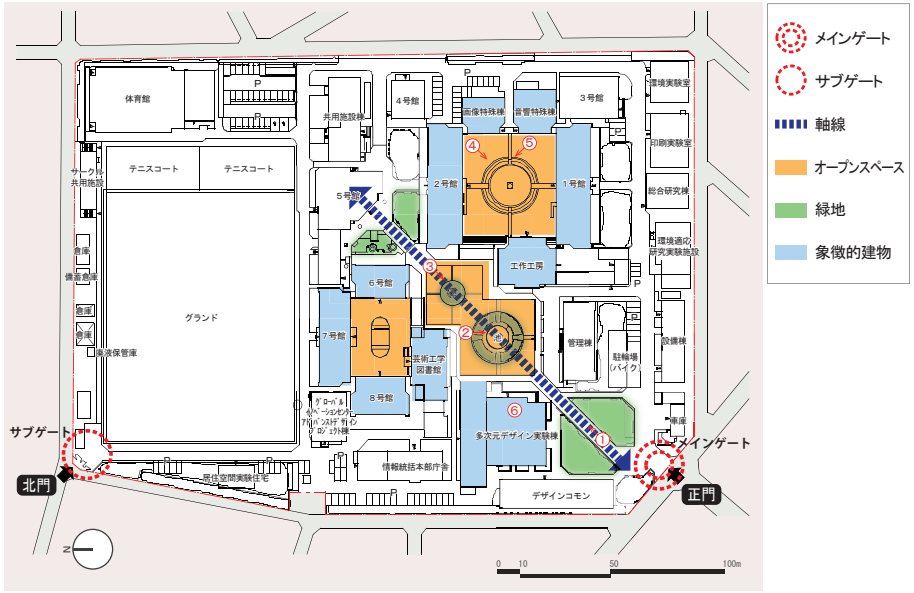


フリー・コミュニケーション
スペースの構成



コミュニケーションスペースの
断面構成

九州芸術工科大学計画（マスタープラン）1969（昭和 44）年　より



（図 3-1）キャンパスに分布する「継承すべきもの」


①保存緑地のプロムナード


②噴水広場


③軸線上にあるシンボルツリー


④建物に囲まれた広場
（通称フライパン）


⑤フライパンを囲む建物


⑥多次元ホール

（写真 3-1）キャンパスに分布する「継承すべきもの」

（3）キャンパスの境界、周辺との連携

大橋キャンパスが立地する地域は、福岡市南部の副都心として位置づけられ、行政、商業、住居施設などが集積しており、西鉄大橋駅を中心とした交通の結節点として大きな役割を担うエリアである。エリアの東側には大橋キャンパスと近接して、福岡市内を貫く豊かな自然環境を成している那珂川が流れており、市民の憩いの空間としての整備が進められている。

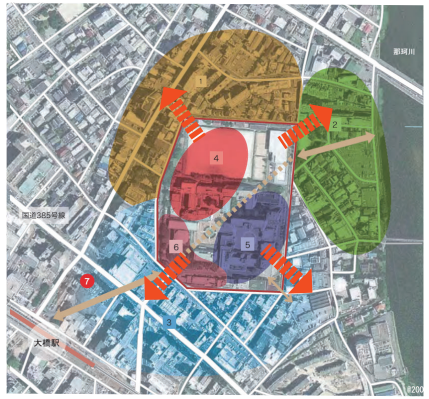
現在、大学の再生と持続可能地域との共生をめざし、キャンパスを生きた実験室（リビングラボ）にするというデザイン提案プログラムの考え方がある。「まちのようにキャンパスをつくり、キャンパスのようにまちをつかう」といった思考のもと、キャンパスの境界を越え周辺と一体的なまちづくりを行うために、地域と連携した大学の実践的な活動が周囲へ滲み出し、地域を特徴づけ、魅力を形成することが必要である。

キャンパスの境界については、創設当初の九州芸術工科大学計画（マスタープラン）および大橋地区フレームワークプラン 2009 をもとに、まちづくりに貢献するキャンパスを実現するために、周辺の土地利用や学生の居住実態などの変化に柔軟に対応する必要がある。現状では、大橋キャンパスの周辺は公道で囲まれており、地域との往来には南側の正門と北門の２つのゲートで繋がっている。周囲には戸建および共同住宅、街区公園などが立地し、中層の建物で構成されるキャンパスと調和した住環境を形成しているが、その境界は柵あるいは植栽で区切られ、周辺地域との間に隔たりがある。

地域に開かれたキャンパスを目指すために、ゾーニングの考え方をキャンパス内で完結させるのではなく、周辺土地利用や機能と連携し、まさにキャンパスがまちに滲み出すようなゾーニングを設定する必要がある（コラム 3-2）。

＊大橋キャンパスからの徒歩圏内にはキャンパス学生総数 1303 名（2021（令和３）年時点）の６％にあたる 77 名の学生が居住している。

（コラム 3-2）共生のための地域とキャンパスのゾーニング



九州大学大橋地区フレームワークプラン 2009 より

（4）インフラストラクチャー

安全・安心なキャンパス環境の維持や将来のキャンパスの変化に対応するために、安定し柔軟性のあるインフラストラクチャーは、必要不可欠なものである。南側エリアの下に埋設されている共同溝は、キャンパスの骨格として機能しており、今後も有効に活用する必要がある。

3-2

3-2 全体計画

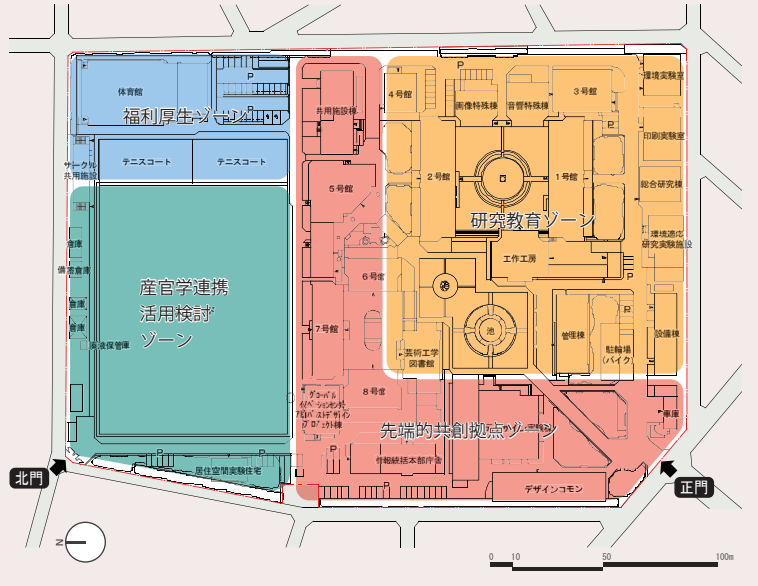
計画および整備の方針

〇キャンパスの適切かつ合理的な利用を図るため、機能に基づくゾーンを設定し、教育研究の特性を考慮した構成、配置、規模、動線等を決定する
〇部局間の連携や将来の更新を見据えた機能的・効果的な土地利用を図る
〇施設の長寿命化を図り、質の高い・安全な教育研究環境を確保する
〇周辺地域に対し風格や歴史性を与え、周辺環境と調和するランドスケープとするとともに、充実したキャンパスライフをもたらす魅力的な環境を整備する

(1)ゾーニングの設定

大橋キャンパスのゾーニングにあたって、明瞭性と利便性、相互の関係性を十分考慮したうえで計画し整備する。

大橋地区フレームワークプラン 2009 で明示されたゾーニングから、さらに現状での施設や空間の機能と役割に基づき、「研究教育ゾーン」、「先端的共創拠点ゾーン」、「福利厚生ゾーン」、「産官学連携活用検討ゾーン」の４つのゾーンを設定する(図 3-2)。各ゾーンにおいては、施設間移動の利便性、施設の更新などに配慮しゾーン内の各種機能の構成と配置を設定する(図 3-2)。



（図 3-2）大橋キャンパスのゾーニング

■ゾーンごとの計画および整備の方針

研究教育ゾーン
・主として教育研究施設、共通利用施設で構成する。
・建物に囲まれた閉じないオープンスペースが連続する空間構成を保存する。
・必要に応じ機能や設備を更新する。

先端的共創拠点ゾーン
・交流機能を持つデザインコモン、図書館、多次元ホール等メディア・情報系施設で構成する。
・大橋副都心と連携した先端的共創拠点の主要施設を形成する。
・「戦略的リノベーション」による老朽改善で機能向上と長寿命化を図る。

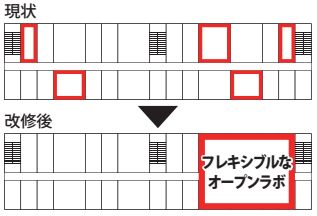
福利厚生ゾーン
・体育館、テニスコートで構成する。
・キャンパスの軸線を強化する。
・塩原東公園、那珂川との連携を強化する。

産官学連携活用検討ゾーン
・現在はグラウンド、倉庫等で構成されている。
・大橋キャンパスの高度利用に向けて学内外組織と連携した活用を検討する。
・竹下駅との連携を強化する。

■戦略的リノベーション（スペースの創出・再生）

戦略的リノベーションとは、新たな施設機能の創出を図る創造的な改修・スペースの集約化を行うことであり、総長のリーダーシップにより全学的な施設マネジメントを戦略的に行うことである。

戦略的リノベーションによる老朽改善で、新たに建物を増やすことなく既存施設で機能強化と長寿命化を図り、保有する施設を最大限に有効活用することが可能となる(図 3-3)。



（図 3-3）戦略的リノベーションのイメージ

社会の変革に対応した機能強化

● **研究力向上(ラボ改革)**
産学連携や異分野間での共同研究等に対応できるフレキシブルなオープンラボを整備し Society5.0 の実現を加速

● **教育の質の向上**
新たな教育課題に対応(アクティブラーニング、ICT 環境などの学修環境)し Society5.0 に資する人材を育成

財務基盤強化

● **安全性確保(ライフライン再生)**
長寿命化を考慮した改善整備とともに防災機能強化など安全性の確保

● **資産の有効活用**

● **省エネルギー化**

3-2

（コラム 3-3）各ゾーンの整備イメージ例

■先端的共創拠点ゾーンの将来イメージ

デザイン学を発信する世界的拠点

デザインミュージアム・デザインを通した社会実験・実装



デザインミュージアム



図書館改修

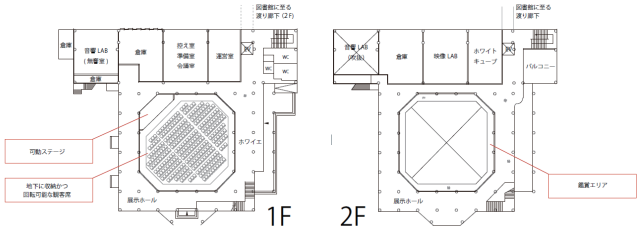
※九大博物館と連携したデザインミュージアムによる発信と、デザイン学・ICT と連動したクリエイティブブリッジ等による世界発信と社会実装。

九州大学大橋キャンパス将来構想 2021（資料集）より

多次元ホールの「戦略的リノベーション」例

天井部分（キャットウォーク、吊りバトン、照明等）の充実を図る

メインホール壁面には引き出し式の棚（もしくは取付口）、電源、LAN コンセントをまんべんなく配置する



施設：1F：メインホール、ホワイエ、展示ホール、音響 LAB（無響室）、控え室、運営室
2F：メインホール鑑賞エリア、展示ホール、ホワイトキューブ、映像 LAB

九州大学大橋キャンパス将来構想 2021 より

■福利厚生ゾーンの将来イメージ



周辺環境と馴染む低層が想定される
共用施設棟の検討

■産官学連携活用検討ゾーンの将来イメージ

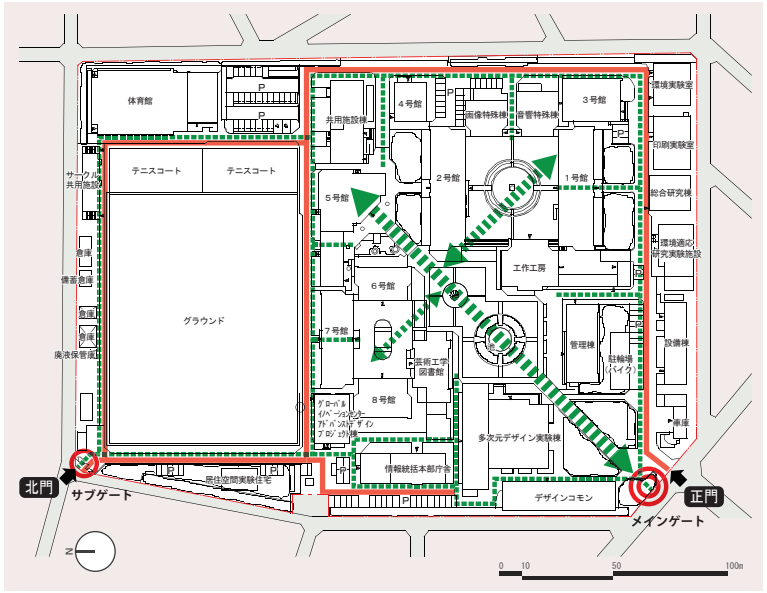


グラウンドの高度利用に関するアイデア

九州大学大橋キャンパス将来構想 2021（資料集）より

（2）全体動線

正門から北東へ伸びる軸線を強化し、キャンパス中央は歩行者中心の動線とする。正門での車輌の出入における安全性を検討した整備を図り、外周道路の歩車分離を推進していくなど、安心して通行できる豊かな街路空間の形成を目指す（図 3-4）。



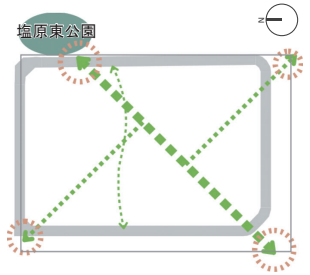
（図 3-4）大橋キャンパスの動線計画

（コラム 3-4）全体動線の整備構想

動線

南西から北東に貫く軸線を中心軸とし、敷地隅の広場に向かうサブの軸線を設定する。それらの軸線は歩行者の動線を示している。中心軸は敷地北東部に隣接する塩原東公園からさらに那珂川に向かう。

車輌は敷地外縁部をめぐる景観に配慮した外周道路からのアクセスとし、現状の隅角部からの入構を排すると共に歩車を分離する。敷地の北と東の外周道路は、隣接して走る一般道路と連携して歩道にとって共に安全で豊かな街路空間を創造する。



九州大学大橋地区フレームワークプラン 2009 より

3-2

（3）ランドスケープ

大橋キャンパスの有する空間的特徴を踏まえ、各ゾーンの特性と立地する資源を活用しつつ、わかりやすいエントランス空間や、周辺地域に馴染む隣接部およびキャンパス内のスカイラインを形成する。

■エントランス（正門）

大橋キャンパスの玄関として、正面性を備える景観づくりを行う。門からキャンパス内正面につづく緑地のプロムナードを保存し、視認性を高め、門周辺の舗装、植栽とともに象徴的な空間として整備する。

■エントランス（北門）

主として歩行者および自転車が利用する空間であることから、歩行者等のスケールに配慮するとともに、安全・安心な空間として、門周辺を整備する。

■キャンパスのスカイライン

キャンパス全体のスカイラインが周辺地域に馴染むように、建物および植栽のボリュームと高さを設定し、周辺地域との一体的な景観形成に努める。

■周辺地域と境界部

周辺地域との境界部では、建物配置や色彩、外壁面の反射光等に配慮し、周辺地域に馴染む環境づくりに努める。

■街路

明確な歩車分離を行い、並木や植栽によって特徴づけられる落ち着いた街路景観を形成する。

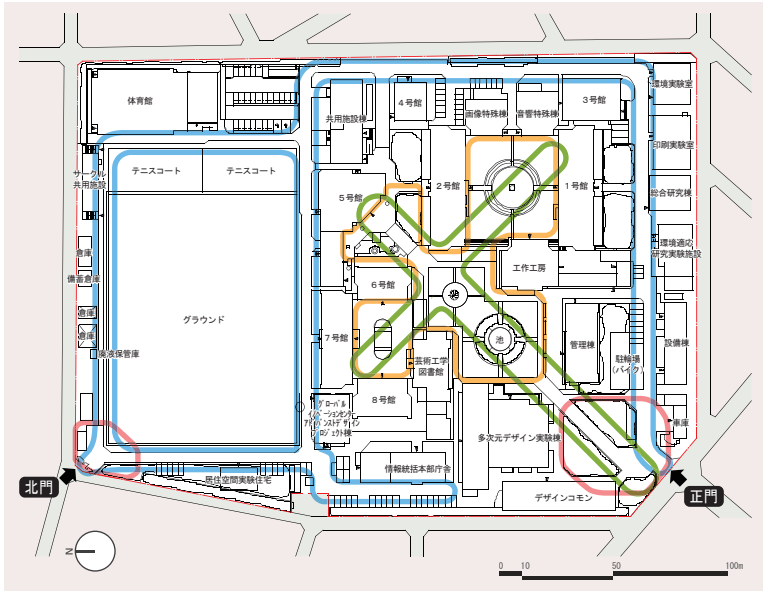
東側および北側の外周道路は、隣接して走る一般路と連携し、歩車ともに安全で豊かな街路景観を形成する。

歩道は、歩行者の歩きやすさと快適性に配慮する。

■植栽

利用者にとって居心地の良いキャンパス空間となる植栽配置の検討や、周辺地域との関係性の観点から、敷地境界の樹木の在り方を検討し、内外共に快適な環境を構築する。

また、地域の生物多様性に寄与する空間づくりや、学生の教育に資するランドスケープデザインなど緑地の多様な視点からの緑化を検討し整備する。

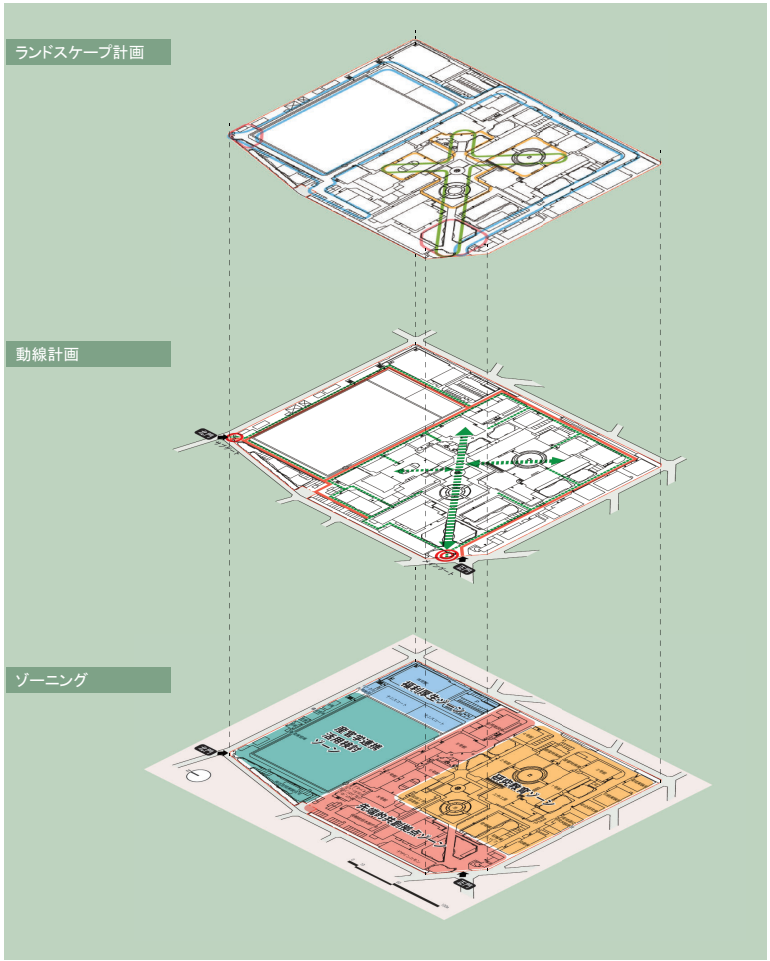


（図 3-5）大橋キャンパスのランドスケープ計画

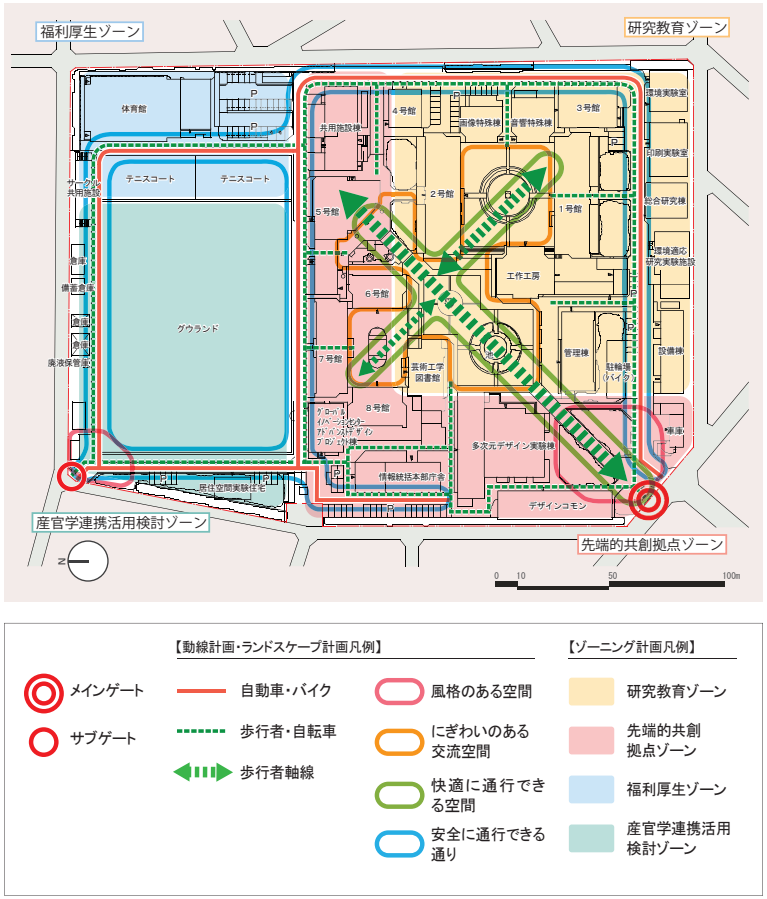
3-2

（4）全体計画

ゾーニング、動線計画、ランドスケープ計画を重ねあわせた全体計画を示す（図３-６、図３-７）。



（図 3-6）全体計画 / レイヤーの重なり



【動線計画・ランドスケープ計画凡例】

- メインゲート
- サブゲート
- 自動車・バイク
- 歩行者・自転車
- 歩行者軸線
- 風格のある空間
- にぎわいのある交流空間
- 快適に通行できる空間
- 安全に通行できる通り

【ゾーニング計画凡例】

- 研究教育ゾーン
- 先端的共創拠点ゾーン
- 福利厚生ゾーン
- 産官学連携活用検討ゾーン

（図 3-7）全体計画

3-3

3-3 要素別計画

大橋キャンパスの骨格を踏まえ、2021-2036 年におけるマスタープランの要素別計画を以下のように設定する。

3-3-1　緑地・植栽

現状と課題を踏まえて、象徴的空間、憩い空間、移動空間など空間特性に合わせた緑地・植栽の活用を図り、愛着と誇りを醸成する環境整備を計画する。

3-3-2　建物

将来的な施設更新を想定した有効利用に適した機能・施設の集約を検討し、施設の総量の最適化および重点的な整備を行う。

3-3-3　動線および駐車場・駐輪場

利用者にとってわかりやすく、安全で快適な動線と利便性の高い駐車場、駐輪場を提供することを目指し計画する。

3-3-4　光環境

キャンパス内に安全・安心をもたらすとともに、各空間特性等に合わせた光環境を計画する。

3-3-5　ストリートファニチャー

キャンパス内に秩序を与えつつ、人々の動きや滞留の役割を担わせるなど、キャンパスに活気を創出する配置やデザインを計画する。

3-3-6　サイン

多様な利用者にとってわかりやすく、大橋キャンパスの魅力を表出した配置やデザインを計画する。

3-2-7　インフラストラクチャー

学生、教職員の安全・安心の確保や、教育研究活動の継続性、事故防止および防災機能強化の観点から、インフラストラクチャーを更新し、省エネルギー、環境負荷低減を計画する。

3-2-8　カーボンニュートラルの達成を目指したその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築計画

国連の進める SDGs の達成およびその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築を目指し計画する。

3-3

3-3-1　緑地・植栽

計画および整備の方針

〇歴史的、魅力的な緑地や樹木を維持・活用し、愛着と誇りを醸成する環境を整備する
〇既存の緑地や樹木の状態と特性を把握・分析し、キャンパスの計画・整備に活用する
〇象徴的空間、憩い空間、移動空間など空間特性に合わせた緑地、樹木の活用を図る
〇多様な視点からの緑化計画を検討し、エディブル・ランドスケープの構築を図る
〇維持管理コストに配慮した計画と整備を行う

創設当初から 50 年以上にわたり管理され成長してきた樹木は、キャンパスの自然環境として定着しているが、場所によっては十分な管理が行き届かず、快適性や美観性等において課題を抱えている。現状と課題を踏まえて、緑地・植栽を「迎える」「誘う」「装う・憩う」「繋ぐ」のキーワードでゾーニングし、緑のネットワークを構築する。

（1）植栽のゾーニング

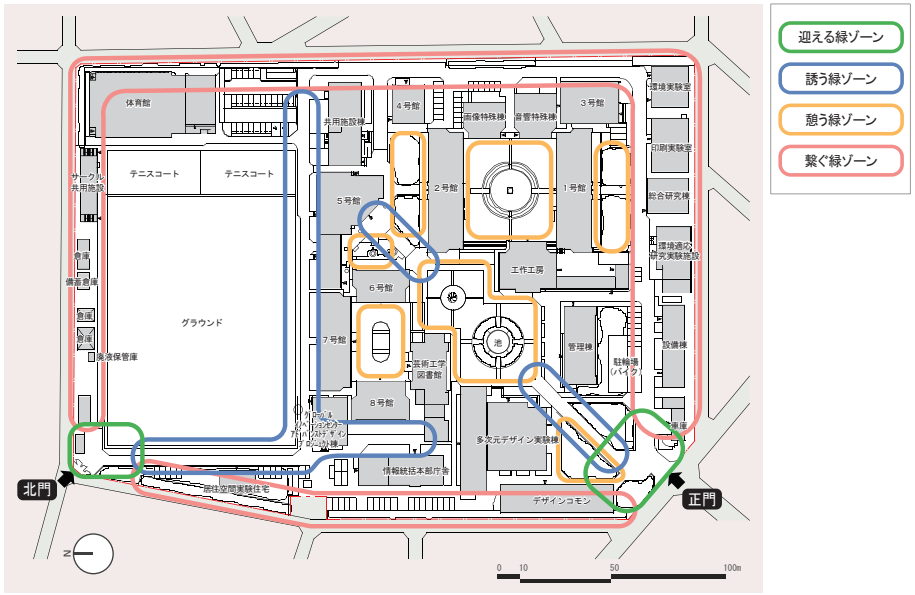
大橋キャンパスは、メインゲート、サブゲート、外周道路、歩道といった全体動線や、求心的な方形の中庭が対角線上に連なるキャンパスの骨格を形成する空間に、研究教育ゾーン、先端的共創拠点ゾーン、福利厚生ゾーン、産官学連携活用検討ゾーンを配置し整備を行っていく。ここには、教育研究、移動、憩いなどの複数の機能を有する空間が存在する。各空間の特性や個性を際立たせ、既存の緑地・植栽を活かした豊かなキャンパス空間、「デザインと芸術、テクノロジーの創造的プラットフォーム」をつくりあげる植栽ゾーンを設定する（図 3-8）。

迎える緑
正門および北門について、キャンパスの訪問客を迎える貴重なエントランス空間として、人々に印象付ける植栽を整備する。

誘う緑
エントランス空間からキャンパスの中心部へ向かう移動空間は、人を誘う（いざなう）貴重な役割を持つことから、明瞭に利用者を導く並木を主とする緑地・植生とする。

憩う緑
キャンパス中心部等の利用者の集う代表的な空間には、それにふさわしく緑地・植栽を整える。

繋ぐ緑
大橋キャンパスにおける緑地空間の相互を繋ぎ、周囲との緩衝地としても機能する役割を担う。



（図 3-8）緑地・植栽帯のゾーニング計画

（2）緑のネットワーク

教育研究、移動、憩いなどの複数の特性を有する空間の特性に相応しい緑地・植栽を整備し、繋ぐ緑によってキャンパス全体のネットワークを構築し、人々に憩いと潤いを与える緑の環境づくりを行う。

（3）プロムナード、シンボルツリー等

保存緑地のプロムナードや、シンボルツリーの緑地・植栽空間は、大橋キャンパスの貴重な資源となっており、キャンパス空間の質の向上に寄与している（写真 3-2）。これらの緑地・植栽を効果的に活用し、さらに豊かな空間として整備する。


①保存緑地のプロムナード


②軸線上にあるシンボルツリー


③建物外壁のナツヅタ

（写真 3-2）

3-3

（4）樹種・デザイン

既存樹木の育成状況を把握するとともに、基本的に既存樹木を活かしながら緑のネットワークを形成する。また、防犯や維持管理面などの観点より検証し、必要に応じて剪定や植替えについて検討し整備を進める。安全性や意匠性に配慮し、植栽ゾーニングを設定し剪定などを行う。

さらに、地域の生物多様性に寄与する空間づくり、学生生活の快適性、キャンパスの美観向上、学生の教育に資するランドスケープデザインなど緑地の多様な視点からの緑化についても検討し、エディブル・ランドスケープの構築を図って行く（コラム 3-5）。

（5）維持管理

安全・安心なキャンパスの実現と植栽ゾーニングの５つの機能（迎える緑、誘う緑、装う緑、憩緑、繋ぐ緑）を実現・保持するために、必要な潅水・剪定・施肥などの維持管理を行う。


①保存緑地のプロムナード
クスノキ/ケヤキ


②噴水広場
ﾁｬﾉｷ/ｻﾂｷﾂﾂｼﾞ/ﾄｳﾀﾞﾝﾂﾂｼﾞ


③7号館前広場
ケヤキ


④5号館前
クスノキ/ケヤキ/イチョウ/ソテツ


⑤4号館
ナツヅタ


⑥共用施設棟前
ヤマザクラ/ケヤキ/クロガネモチ


⑦東側周辺境界部
アラカシ/ヤブツバキ


⑧北門側周遊道路
ケヤキ/カイヅカイブキ

（写真 3-3）

（コラム 3-5）緑地・植栽の整備イメージ例

エディブル・ランドスケープの構築

樹種選定の上では、現在芸工キャンパスに存在しない九州の在来種を優先的に用い、植物社会学上、群落コミュニティとして成立し得る植物の組合せを提案する。また、バイオラボ・フードラボとの連携により、エディブル・ランドスケープを構築し、生き物を指標とした樹種選定により世界的にも先進的な生物多様性キャンパスを実現する。



九州大学大橋キャンパス将来構想 2021 より

3-3

3-3-2　建物

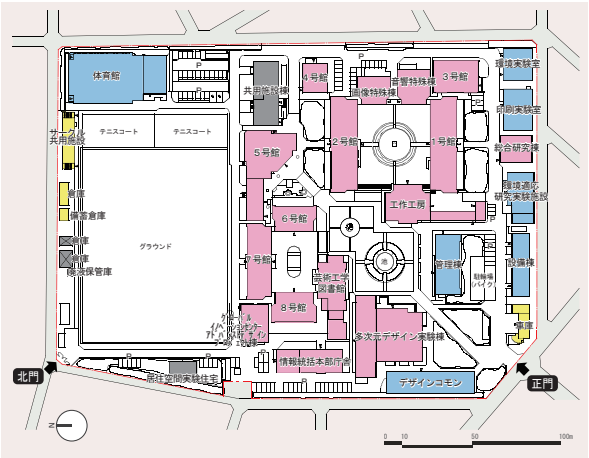
計画および整備の方針

〇部局間や各種施設との多様な連携を支援し、有効利用に適した機能・施設の集約を行う
〇施設等の優先度を分類し、施設の総量の最適化と重点的な整備を行う
〇長期的視点で施設等の必要性を考慮し、真に必要な施設を優先的に整備する

経年数 50 年以上の施設を延べ床面積の 40%を保有しており、そのうち約 70%の建物が改修済みである。ほとんどの建物が耐震性を有することが確認されているが、老朽施設の維持管理・更新や大規模改修等の整備を計画的に行っていく。

・当該施設で果たしている役割、機能、利用状況、重要性等を考慮し、施設等の優先度を分類し、施設の総量の最適化と重点的な整備（施設のトリアージ）を行う。
・改修などの時期が集中するため、工事中の代替施設の確保や予算規模の平準化を図る必要がある（表 3-1）。
・さらに、維持管理経費の確保が厳しい折、改築・改修計画策定時には、長期的に必要となる施設か、将来的に不要となる施設かの判断を行い、真に必要な施設のみ整備する。これにより、施設の総量の最適化が図られ、大学経営基盤の強化につながるもとの思われる。

A:重点的な投資を行い、機能向上および性能維持を確保する施設
B:主に施設の物理的な性能維持を確保する施設
C:最小限の安全性を確保する施設
D:安全性の確保および廃止を検討する施設



（図 3-9）計画・整備の対象建物

整備手法※1	棟番号	建物名称	建築年（西暦）	経年（年）※2	床面積（㎡）	整備内容	主な用途	基本方針（重点カテゴリー） 安全・安心	機能強化	カーボンニュートラルエネルギー	今期年次計画 I 2016～21	II 2022～27	III 2028～33
施設整備費・自己整備	3	多次元デザイン実験棟	1960	61	2,083	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	11	工作工房棟	1970	51	1,605	改修	大学教育・研究施設	○	○	－			
	12	1号館	1970	51	3,738	改修	大学教育・研究施設	○	○	－	⟷		
	13	音響特殊棟	1970	51	797	改修	大学教育・研究施設	○	○	－	⟷		
	14	画像特殊棟	1970	51	623	改修	大学教育・研究施設	○	○	－	⟷		
	15	2号館	1970	51	3,738	改修	大学教育・研究施設	○	○	－	⟷		
	16	6号館	1970	51	829	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	19	情報統括本部庁舎	1971	50	974	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	20	7号館	1972	49	1,860	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	21	芸術工学図書館	1972	49	1,987	改修	大学図書館	○	○	－		⟷	
	22	8号館	1976	45	1,014	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	23	4号館	1978	43	1,209	改修	大学教育・研究施設	○	○	－		⟷	
	29	5号館	1990	31	5,471	改修	大学教育・研究施設	○	○	－			⟷
	30	3号館	1997	24	3,322	改修	大学教育・研究施設	○	○	－			
	31	グローバルイノベーションセンター	1999	22	1,146	改修	大学教育・研究施設	○	○	－			
	32	総合研究棟	2003	18	1,030	改修	大学教育・研究施設	○	○	－			
自己整備	2	共用施設棟	1957	64	2,009	維持管理	大学支援施設	○	－	－			
	5	倉庫	1954	67	76	維持管理	大学管理施設	○	－	－			
	6	倉庫	1955	66	40	維持管理	大学管理施設	○	－	－			
	7	倉庫	1961	60	69	維持管理	大学管理施設	○	－	－		⟷	
	9	サークル共用施設	1972	49	364	維持管理	大学体育施設	○	－	－			⟷
	10	体育館	1970	51	1,743	改修	大学体育施設	○	－	－			
	17	設備棟	1970	51	361	改修	大学設備室等	○	－	－		⟷	
	18	環境適応研究実験施設	1971	50	744	改修	大学教育・研究施設	○	－	－		⟷	
	24	管理棟	1979	42	1,739	改修	大学管理施設	○	－	－		⟷	
	25	車庫	1979	42	156	維持管理	大学管理施設	○	－	－			
	27	印刷実験室	1983	38	632	改修	大学教育・研究施設	○	－	－	⟷		
	28	環境実験棟	1986	35	432	改修	大学教育・研究施設	○	－	－	⟷		
	33	廃液保管庫	2003	18	10	維持管理	大学管理施設	○	－	－			
	34	居住空間実験住宅	2008	13	193	維持管理	大学教育・研究施設	○	－	－			
	36	備蓄倉庫（6）	2014	7	39	維持管理	大学管理施設	○	－	－			
	37	デザインコモン	2017	4	1,238	改修	大学教育・研究施設	○	－	－			

※1：整備手法の施設整備費は施設整備費等補助金を示し、自己資金は学内経費・寄付金・他省庁補助金等を示す。
※2：経年（年）は、2021時点での建築年からの経過年数を示す。
※3：具体的な整備計画については、個々の施設の状況および大学の方針により、別途定めるものとする。

（表 3-1）

A:重点的な投資を行い、機能向上および性能維持を確保する施設
B:主に施設の物理的な性能維持を確保する施設
C:最小限の安全性を確保する施設

3-3-3　動線および駐車場・駐輪場

計画および整備の方針

〇利用者にとってわかりやすく、機能性と安全性を備える動線を確保する
〇多様な利用者の属性、緊急車両やサービス車両などの通行に留意し、動線の共用・分離を適切に行う
〇歩いて楽しく、キャンパス特有の雰囲気を堪能できる動線環境を維持・創出する
〇キャンパス内の段階的な整備の過程で安全な移動空間となるよう道路線形を整理する
〇キャンパス内施設の利便性を高める動線と駐車場、駐輪場の適切な計画と整備を行う

大橋キャンパスにおける教育研究の活動を支え、また、多様な利用者が安全に目的地に到達できる動線と駐車場および駐輪場は、重要なキャンパス空間の構成要素である。

大橋キャンパスの開設より現在まで継承されてきた、軸線上に連なる求心的な方形の中庭空間と、外周部の道路空間を確認することができ、前者は歩行者空間、後者は主に車輌の動線空間となっている。現状、歩行者動線と車輌動線が重複する変則的な交差点において、事故の危険性がみられる場所もあるため、歩車道の分離化を行うなど、歩行者への配慮が必要となっている。こうしたことから、利用者にとって分かりやすく、安全で快適な動線と利便性の高い駐車場、駐輪場を提供することを目指し計画する。

既に構築された道路ネットワークを維持・活用するとともに、より機能的で安全性の高い動線と駐車場、駐輪場を計画し整備する。

（1）利用者属性による動線区分

移動手段（歩行者、自転車、バイク、自動車）による区分を行う。

■歩行者

すべてのゲートから入構可能とし、自動車等と分離した歩行者を最優先する動線づくりを行う。

■自転車

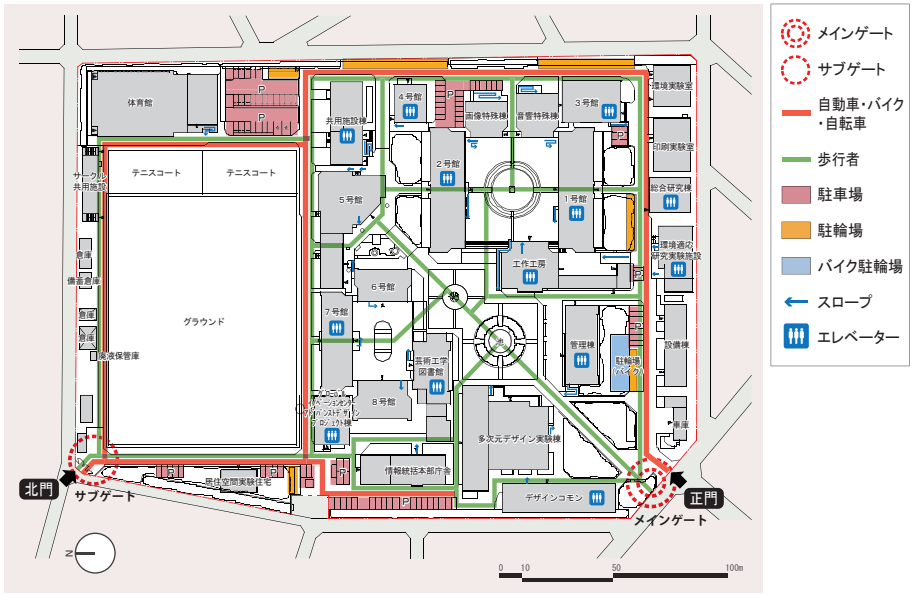
すべてのゲートから入構可能とし、自転車の専用ルートを整備する。

■バイク

自動車と同様に、歩行者とは明確に区分できる安全な動線を確保する。

■自動車

歩行者とは明確に区分でき、正門から負荷なく移動できる安全な動線を確保する。日常は、正門から入構できるが、緊急車両はサブゲート（北門）も使用できる。



（図 3-10）利用者属性による動線区分

（2）道路規格（外周道路、歩道等）

基本的に既存道路を維持、活用するが、通行上の視認性、安全性について改善が必要な箇所は、施設更新時に道路線形を整理したうえで、歩行空間、自転車路を区分し、改善する。長期的には、歩行者と車輌の通行量に応じて段階的に幅員を整理するとともに、滞留空間等との繋がりに配慮する。

（3）駐車場

基本的に既存の駐車場を維持活用するが、教職員、学生、一般入構者の需要を勘案し、ゾーンの需要に応じた適切な駐車台数を確保する。公共交通の通行時間外の夜間活動に伴う需要も考慮した運用を行う。また、必要に応じて植栽等により、景観にも配慮する。

（4）駐輪場

自転車利用者の行動を踏まえ、無秩序な駐輪を防止し、利便性に配慮したルート設定と駐輪場の設置を行う。

3-3-4　光環境

計画および整備の方針

〇安全性や防犯性、安心感や快適性をもたらす光環境づくりを行う
〇各種建物や機能による空間特性を考慮し、それらと整合する光環境ゾーンを設定する
〇象徴的空間、憩い空間、移動空間など空間特性や要求性能に合わせた光環境を提供する
〇美観性、機能性、経済性など複数の観点に配慮した光環境の計画と整備を行う
〇キャンパスの既存状態の評価分析をもとに最適な光環境の構築を図る

教育研究の主たる活動空間のほか、キャンパスには移動のための動線空間、大小のオープンスペース、駐車場、駐輪場など、各々の役割を担う空間がある。また、昼間時と夜間時において利用者の行動も変化することから、これら各空間に求める役割や機能とそれを支える生態や品質は必ずしも同一ではなく、特に夜間時においては、防犯性や安全性の確保が重要である。キャンパスの光環境に関する現況と課題を踏まえ、照明装置の配置等を計画する。

（1）光環境ゾーニング

前述のように大橋キャンパスには、様々な活動空間があり、各空間に対し夜間時に求める役割、機能、性能及び品質が異なる。また、利用者数が空間により異なることから経済的観点にも配慮し、夜間時における空間利用の特性により４つの光環境ゾーンを設定し、各ゾーンと整合する計画と整備を行う。

クラス S ゾーン

エントランス空間は、夜間の利用者が多いことから、最も照度が高いゾーンとして位置づけ整備する。また、経済性に配慮しつつ建築や樹木等のライトアップ、投光により、空間を演出し、象徴的空間として整備する。

クラス A ゾーン

駐車場、交差点部は、安全性の確保と空間の明瞭性を高めるゾーンとして位置付け整備する。

クラス B ゾーン

外周道路等の車道は、安全・安心を確保できる照度を設置し整備する。

その他のゾーン

キャンパス周辺との境界部は、周辺地域の光環境を考慮して照度を設定し整備する。



（図 3-11）照度分布（整備目標達成後）

（2）移動空間の照明計画

外周道路および歩行者空間は、キャンパスの重要な移動空間であることから、それぞれの特性に応じた照明計画を行う（図 3-11）。

（3）照明器具・光源・照明方式

照明器具、光源、照明方式については、各空間の特性や経済性、維持管理の容易性などを考慮して整備する。

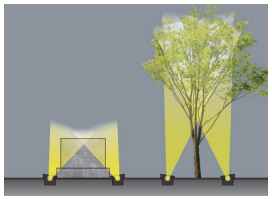
ベース照明



キャンパス内では、ポール灯をベース照明とする。ただし、周辺に光害を及ぼさないように配慮する。

（図 3-12）

演出照明



記念碑や記念樹等のある空間を、魅力的にするため、ライトアップ等の手法による演出が考えられる。

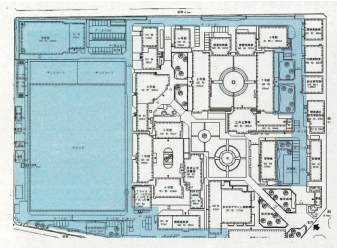
（図 3-13）

3-3

（コラム 3-6）光環境の整備イメージ例

環境維持系ストリートファニチャー

大橋キャンパスは、外周に駐車・駐輪等の施設、建物に囲まれた内部は原則車輌進入禁止の歩行エリアとして区分されていることからシェルターや照明塔は、この区分に従い外周のみに設置。

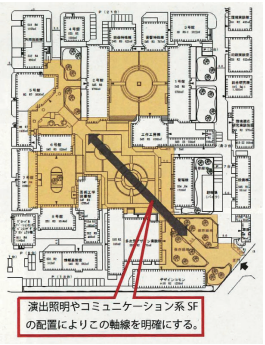


照明塔イメージ



コミュニケーション系ストリートファニチャー

歩行エリア内には照明塔は設置せず、演出照明として地中埋込タイプ、足元灯のみの設置とする。正門から５号館に向かうキャンパス内を貫く軸線を明確にするため、この軸線を意識した演出照明の配置を計画。



演出照明イメージ



九州大学大橋キャンパス将来構想 2021（資料集）より

3-3-5　ストリートファニチャー

計画および整備の方針

〇建築物や植栽等が創出する景観的価値を支える役割とする
〇キャンパス内の安全を確保し、秩序を与える配置や設計とする
〇人々の利用行動に臨機応変に対応し、キャンパスに活気を創出する
〇環境を構成する要素を適切に維持管理する

キャンパスを利用するうえで必要な駐輪場シェルターや照明塔、休憩行為を誘発するベンチなど、大小様々な要素があるが、同じ役割を持つものでもデザインや劣化度合等に違いが見受けられる。計画的にメンテナンスを行うとともに、キャンパス空間の区分を意識した配置と用途に応じたデザインを検討し、秩序を与える配置や設計を行う。また、人々の動きや滞留・交流の役割を担わせるベンチ等のコミュニケーション系ストリートファニチャーの整備を積極的に行うなど、キャンパスに活気を創出する。

（1）配置

キャンパス空間の外周部と内部の区分に合わせた配置計画を行う。

駐車・駐輪等の施設が配置されている外周部については、シェルターや照明塔等のキャンパスの環境維持において必要とされるストリートファニチャーを、秩序を持たせた配置等を考慮し計画する。

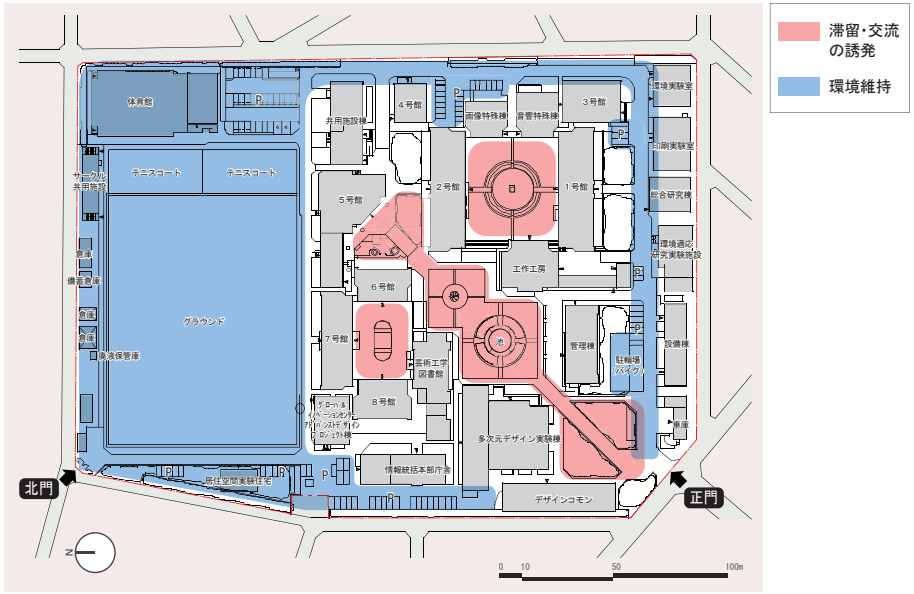
建物に囲まれたキャンパス内部については、正門から北東へ向かう軸線を際立たせる配置計画を検討のうえ、ベンチ等の休憩行為を誘発し人々の交流を生み出すアイテムや、足元灯等の演出照明等の配置を計画する。

（2）デザイン

シェルターやボラード、ごみ箱等の人々のキャンパス利用において必要とされるストリートファニチャー類は、システム化しその存在をあまり気づかせないようなシンプルなデザインに配慮し計画する。ベンチ等の休憩行為を誘発するストリートファニチャーは、ユニット式や可動式にするなど学際等の学校行事によって臨機応変に対応できるデザインを検討し計画する。

（3）維持管理

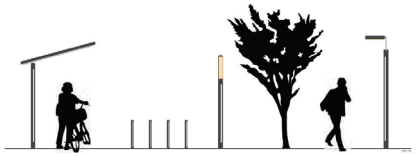
計画に基づきキャンパス内の環境およびストリートファニチャー類の配置やデザイン等の秩序を保つために、組織体制の構築を図り継続的なメンテナンスを実施する。



（図 3-14）ストリートファニチャーのゾーン計画

（コラム 3-4）ストリートファニチャー（SF）の整備イメージ例

環境維持系 SF デザインコンセプト
- 規則性



コミュニケーション系 SF デザインコンセプト
- 適応性



・キャンパス内の主役は、文化財としての価値も有する建築物や緑陰空間を創出する植栽ととらえ、脇から支える位置づけとする。
・キャンパス内で実施される各種行事に合わせキャンパス内を彩り、人々の利用行動に臨機応変に対応ができるストリートファニチャーを創出する。

九州大学大橋キャンパス将来構想 2021 より

3-3-6　サイン

計画および整備の方針

〇利用者が「ホスピタリティ」に触れることが出来るサインデザインを構築し運用する
〇多様な利用者のわかりやすさを包摂したキャンパス空間とする
〇大橋キャンパスの魅力を表出するサインデザインを構築する
〇キャンパス内の環境および秩序の維持管理を行う

正門付近に設置された大型の施設全体案内や、キャンパス内各地の駐輪・喫煙等に関する禁止標識等、目的に応じて様々な種類のサインが点在している。それらが混在し分かりにくさが生じている場所があるなどの現状を踏まえ、必要性等を整理した配置計画を行い、多様な利用者に対応したわかりやすいデザインに配慮し、ホスピタリティを感じられる空間となるよう計画し整備する。

（1）配置

駐車・駐輪等の施設が配置されている外周部については、場所ごとに必要となる案内サインや注意喚起サイン等を、目に入りやすくも混在を避け、整理された配置を計画する。

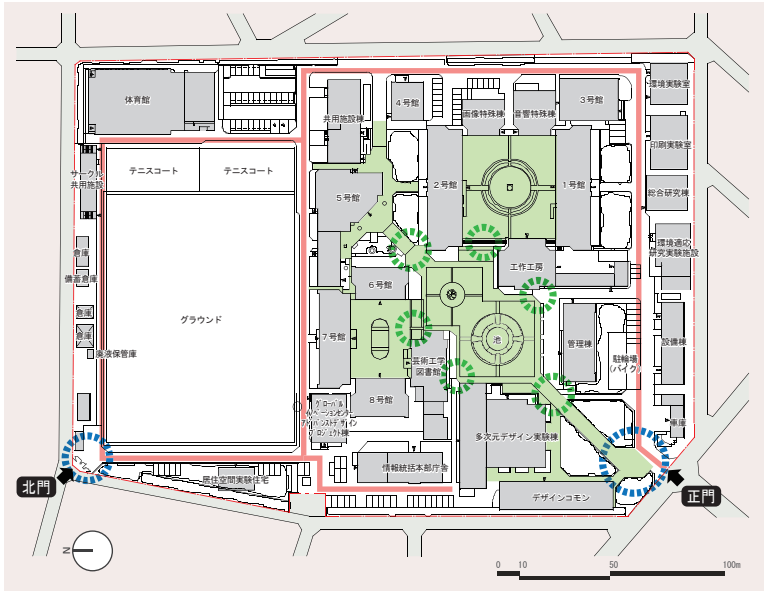
キャンパス内部の歩行者動線エリアについては、総合案内サインから分岐地点の案内サイン、各建物サイン等へと段階を追ったメリハリのある、学外および学内利用者にもわかりやすい配置等を検討し整備する。号館サインは、正門から北東へ向かう動線上からの視点を重視した分かりやすい配置計画を行う。

（2）デザイン

周辺の地域住民や外国人および障がい者の方にも対応した、誰もが分かりやすいピクトグラムやマップ、号館表示等のビジュアルを検討する。素材や形、色彩等については、キャンパス空間と調和し、他のストリートファニチャー類と連携のとれた統一されたシンプルなデザインを計画する。

（3）維持管理

ガイドラインを作成するなど、キャンパス内の環境および秩序の維持管理を行うために、組織体制の構築を図り継続的なメンテナンスを実施する。

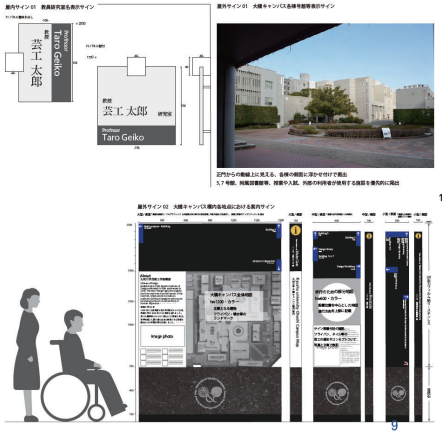


（図3-15）サイン配置のゾーン計画

（コラム 3-7）サインデザインの整備イメージ例

大橋キャンパスの魅力を表出し
わかりやすいサインの構築

「開かれ」「連携し」「魅力的な」大学を、構内のデザインから表出するために、利用者が「ホスピテリティ」を感じ、かつ大学の「アイデンティティ」に触れることができる屋内外のサインデザイン。



九州大学大橋キャンパス将来構想 2021 より

3-3-7　インフラストラクチャー

計画および整備の方針

○既存インフラストラクチャーの長期的活用を前提に、関連する要素間の計画を整合させる
○将来的な土地利用変更や施設再編に柔軟に対応できるルートを想定し、確保する
○災害時の安全性や迅速な復旧を保証するセーフティネットを確実に計画し、整備する
○既存状態の評価分析をもとにインフラストラクチャーの維持・改修を計画する
○将来的な建物更新（建替え・改修）に対する柔軟性を確保する

インフラストラクチャーは、教育研究活動を支える基盤として重要である。学生、教職員の安全・安心の確保や教育研究活動の継続性、事故防止および防災機能強化の観点から、インフラストラクチャーを更新し、省エネルギー・環境負荷低減を計画する。

（1）安全・安心を確保するインフラストラクチャー計画

・法定耐用年数の概ね２倍を経過した屋外給排水、屋外ガス管、屋外電力線および受変電設備などの更新を計画的に行う
・建物の改修・新築・増築に伴って情報通信網の充実を図る
・災害時の水源確保のための井水を積極的に活用する

（2）インフラストラクチャーの維持管理計画

・2016（平成 28）年 11 月に策定した行動計画に基づき「個別施設計画」を策定し、教育研究活動の基盤である施設・インフラ設備の維持管理・更新などを着実に実施する

3-3-8　カーボンニュートラルの達成を目指したその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築計画

計画および整備の方針

○高度な教育研究活動を保証するキャンパスの目標像を実現し、持続可能とするための体制を構築する
○地球環境に配慮したサステイナブルキャンパスを目指す
○部局間や各種施設との多様な連携を支援する適切な機能・施設の集約と配置を行う
○教育研究をとりまく環境や社会要請の変化に柔軟に対応するスペースを確保する

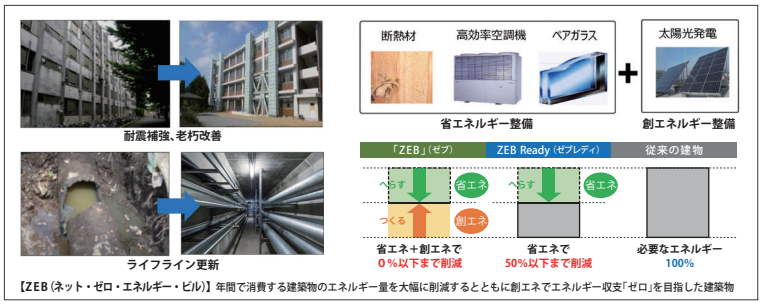
教育研究活動を支える上でキャンパス環境を適切に維持していくだけでなく、国立大学法人の社会的責任として、地球環境への配慮や施設運営の適正化などの観点から一層の省エネルギーの推進や維持管理コスト削減などに取組むことが求められている。国が掲げるカーボンニュートラルの達成を目指すとともにその先の展開に貢献するサステイナブルな環境・建築を目指し計画する。

（1）サステイナブルな環境・建築のための計画

2030 年の九州のありたい姿を描き、その実現へのアクションプランを示す「九州将来ビジョン 2030（一般社団法人九州経済連合会 2021（令和 3）年 5 月 10 日発行）」において、カーボンニュートラルを先導するエネルギー環境の整備が提唱されている。また、本学における「指定国立大学法人構想」では、脱炭素への貢献として「グリーンイノベーションハブ」の目標が掲げられている。

大橋キャンパスにおいては安全・安心な教育研究環境の計画的な整備を行うことにより、2050 年のカーボンニュートラル達成を目指し、地域における脱炭素社会の実現をリードするため率先して整備を行う。具体には施設の ZEB 先導モデルとなり他大学や地域へ横展開を図る。

地域社会の共創拠点として率先して大橋キャンパスの脱炭素化に取り組むことで、地域の二酸化炭素の排出量削減に貢献し、引いてはイノベーション創出とともに地方活性化に向けた基盤づくりに貢献する（図 3-16）。



（図3-16）事業イメージ

3-3

（2）カーボンニュートラルの達成を目指すためのエネルギーマネジメント体制の構築

キャンパス計画及び施設管理委員会の下に新たに設置された「カーボンニュートラルキャンパス実現に向けた検討チーム」において策定された「大学の方針」や「大学全体のロードマップ」に基づき、新たな発想により積極的に脱炭素化に取り組む。なお、カーボンニュートラル達成には、施設単位だけではなく、研究（研究実験等における取組として、実験機器等の計画的な更新及び高効率実験機器の導入）や運用（運用における取組として、電力使用量の見える化及び節電対策等のルール作り、空調の適温設定）を含めた取り組みを着実に行う。

（3）施設等の有効活用の推進

「施設は大学全体の共有財産」であるとの観点から、建物利用者が部屋使用を固定化させる事がないよう、また、組織別の面積配分に偏りがないよう配慮し、プロジェクト研究などにおける新たなニーズのスペースを確保するなど、施設規模の最適化を目的として、組織の規模（学生数、教職員数など）や、変化に応じた施設の規模を検討する。

新たに整備した施設使用制度に基づき、スペースの再配分や全学共用スペースの創出など、戦略的に施設の有効活用に取組む。

（4）適切な維持管理計画

施設・インフラ設備の維持管理・更新などの中長期的な取組みの基本的方向性を示す「九州大学施設・インフラ長寿命化行動計画（2016（平成 28）年 11 月）」及び戦略的に維持管理・更新を推進するために施設毎の具体的な方針を定めた「個別施設計画（2020（令和 1）年 3 月）」に基づき、今後も定期的な建物劣化診断の実施による防水、外壁及び設備等における健全性の保持や高効率空調機及び高効率照明器具（LED 化）の省エネルギー型機器の導入など、教育研究活動の基盤である施設・インフラ設備の維持管理・更新を計画的に実施する。

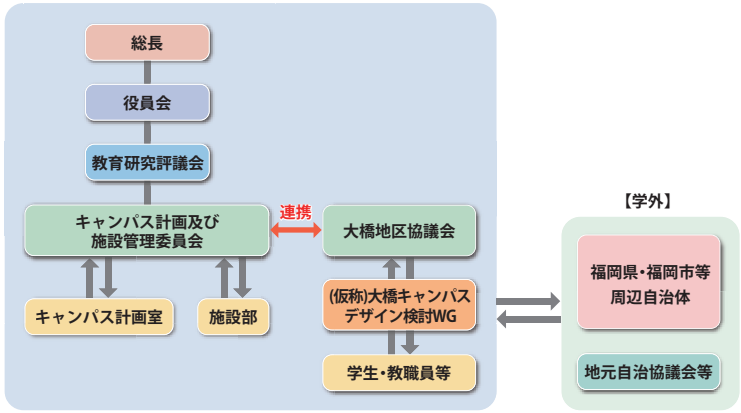
（5）キャンパスマスタープラン実現に向けた取組み体制

キャンパス計画及び施設管理委員会を中心に次に掲げる調査審議を行い、キャンパス整備を推進する。キャンパスの課題解決に向けて大橋地区協議会と連携し対応を図る。

1）キャンパスの全体構想に関すること
2）キャンパスの整備、管理および有効活用に関すること
3）キャンパス全体のエネルギー管理に関すること

総長が指名する理事を室長とするキャンパス計画室、並びに、関連する事務局とともに、キャンパスをとりまく様々な課題などの解消に向けた取組みを行い、サステイナブルキャンパスの形成を推進する。これらの取組みの中でキャンパスマスタープランの主要な部分の変更が必要となる場合には、大橋地区協議会において検討を開始する。

また、整備にあたっては、必要に応じ大橋地区協議会の中で空間の基本的論理に基づき景観形成に関する検討を行い、キャンパス計画及び施設管理委員会との連携を図る（図 3-17）。



（図3-17）キャンパスマスタープランの実現に向けた取組み体制

おわりに

九州大学は、我が国の基幹大学として培ってきた百年以上にわたる歴史と伝統を礎に、社会に開かれた、絶えず変革し、常に新しい世界最高レベルの教育研究拠点の歩みを加速させている。「教育」、「研究」、「社会貢献」、「国際貢献」を主要な活動分野と定めて力を集中させ、「実績に基づく新科学領域への展開」と「歴史的・地理的な必然が導くアジア指向」を基本的方向性として将来を見据えている。

福岡都市圏に位置する九州大学は、アジア、そして世界の国々と人的・学術的交流の歴史を積み重ねてきた。大橋キャンパスマスタープランは、創造性と人間性豊かな人材を育み、優れた研究成果を世界に発信し続けることにより、九州大学が地域とともに一層発展する舞台として、また、絶えず変化する学術分野に対応する様々な施設などを検討する際の拠り所としての役割が期待される。

関係各位のご理解と温かいご支援をお願いしたい。

資料編

ページ	タイトル等		出典元
第１章			
0		表紙	芸工広報リソース（Photo: Road Izumiyama）
1		表紙裏	国土地理院
5・6		１章扉	芸工広報リソース（Photo: Road Izumiyama）
13	図 1-4	イノベーション・コモンズのイメージ	九州大学芸術工学部 大学院芸術工学府 大学院芸術工学研究院 キャンパス案内 2020-2021
第２章			
19・20		２章扉	芸工広報リソース（Photo: Road Izumiyama）
22	写真 2-1	大橋キャンパス周辺	Google Earth @2021 ZENRIN
22	図 2-1	福岡県における大橋キャンパス	国土地理院
22	図 2-2	大橋キャンパス周辺図	
22	写真 2-2	福岡都心部（福岡城跡堀）	福岡市　まるごと福岡・博多
22	写真 2-3	博多港	福岡市　まるごと福岡・博多
22	写真 2-4	福岡空港国際線ターミナル	福岡市　まるごと福岡・博多
23・24	図 2-3	立地環境の変遷	時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」http://ktgis.net/kjmapw/
25	図 2-4	大橋キャンパスにおける組織の概要　2021（令和 3）年 4 月	
26	写真 2-5	大橋キャンパス	Google Earth @2021 ZENRIN
27	図 2-5	大橋キャンパスにおける組織のあゆみ	
28	図 2-6	キャンパス空間の変遷	国土地理院
28	写真 2-6	写真で見る大橋キャンパスの歴史	九州大学文書館（上から１番目、４番目）
29	図 2-7	大橋キャンパスにかかる制限など	
30	図 2-8	航空法による高さ制限 -1	
30	図 2-9	航空法による高さ制限 -2	
31	図 2-10	象徴的空間・資源の分布	
32	写真 2-7-1	正門周辺境界部	
32	写真 2-7-2	東側境界部	
32	写真 2-7-3	北側境界部	
32	写真 2-7-4	保存緑地プロムナード	
32	写真 2-7-5	池（噴水広場）	
32	写真 2-7-6	噴水広場	
32	写真 2-7-7	芸術工学図書館横	
32	写真 2-7-8	５号館前	
32	写真 2-7-9	１号館（フライパン広場）	
32	写真 2-7-10	２号館	
32	写真 2-7-11	７号館前広場	
32	写真 2-7-12	芸術工学図書館	
33	図 2-11	建物の用途と配置	
34	図 2-12	建物高さの分布	
34	写真 2-8-1	３号館	
34	写真 2-8-2	体育館	
34	写真 2-8-3	５号館	
34	写真 2-8-4	デザインコモン	
35	図 2-11	キャンパスの境界部の状況	
35	写真 2-9-1	北東境界部	
35	写真 2-9-2	北東境界部	
35	写真 2-9-3	東境界部	
35	写真 2-9-4	南東境界部	
35	写真 2-9-5	南東境界部	
35	写真 2-9-6	正門	
35	写真 2-9-7	南西境界部	
35	写真 2-9-8	北境界部	
35	写真 2-9-9	北門	
35	写真 2-9-10	北西境界部	
35	写真 2-9-11	西境界部	
36	図 2-14	オープンスペース（広場等）の分布	
36	写真 2-10-1	デザインコモン前	
36	写真 2-10-2	多次元デザイン実験棟前	
36	写真 2-10-3	噴水	
36	写真 2-10-4	芸術工学図書館横	
36	写真 2-10-5	７号館前	
36	写真 2-10-6	フライパン広場	
36	写真 2-10-7	５号館前	
36	写真 2-10-8	グラウンド	
37	図 2-13	緑の分布	
38	図 2-14	樹種および分布	
38	写真 2-11-1	クスノキ	
38	写真 2-11-2	カイヅカイブキ	
38	写真 2-11-3	チャノキ／サツキツツジ／ドウダンツツジ	
38	写真 2-11-4	ナツヅタ	
39	図 2-15	記念碑・記念樹等の分布	
39	写真 2-12-1	駐輪場シェルター	
39	写真 2-12-2	照明塔	
39	写真 2-12-3	石造ベンチ	
39	写真 2-12-4	樹脂製ベンチ	
39	写真 2-12-5	芸術工科大学旧表札	
39	写真 2-12-6	筑紫中学校記念碑	
39	写真 2-12-7	タイムカプセル	
39	写真 2-12-8	記念樹（タイサンボク）	

※記載なし：検討会作成

ページ	タイトル等		出典元
第２章			
40	図 2-16	サインの分布	
40	写真 2-13-1	正門付近	
40	写真 2-13-2	大型施設案内サイン	
40	写真 2-13-3	施設入口案内サイン	
40	写真 2-13-4	駐車場サイン	
40	写真 2-13-5	駐輪場注意喚起サイン	
40	写真 2-13-6	駐輪禁止サイン	
40	写真 2-13-7	進入禁止サイン	
40	写真 2-13-8	喫煙禁止サイン	
41	図 2-17	照度分布	
41	写真 2-14	-	
42	図 2-18	手段別の動線	
42	写真 2-15-1	北門	
42	写真 2-15-2	北門からの歩車道	
42	写真 2-15-3	正門	
42	写真 2-15-4	正門からの歩車道	
43	図 2-19	-	
43	写真 2-16-1	体育館前（歩車道）	
43	写真 2-16-2	共用施設棟横（歩車道）	
43	写真 2-16-3	テニスコート（歩車道）	
43	写真 2-16-4	設備棟前（歩車道）	
43	写真 2-16-5	情報統括本部庁舎前（歩車道）	
43	写真 2-16-6	管理棟前（歩車道）	
44	図 2-20	駐車場の配置	
44	写真 2-17-1	体育館前	
44	写真 2-17-2	画像特殊棟裏	
44	写真 2-17-3	設備棟前	
44	写真 2-17-4	情報統括本部庁舎裏	
45	図 2-21	駐輪場の配置	
45	写真 2-18-1	７号館前	
45	写真 2-18-2	共用施設棟前	
45	写真 2-18-3	３号館横	
45	写真 2-18-4	多次元デザイン実験棟裏	
45	写真 2-18-5	設備棟前（デザインコモン外来者用）	
45	写真 2-18-6	１号館前	
46	図 2-22	経年と耐震性能の分布	
46	図 2-23	建物の経年状況	
47	図 2-24	大学全体の総エネルギー量　原油換算（kL）	
47	図 2-25	大橋キャンパスのガス使用量（㎥）	
47	図 2-26	大橋キャンパスの電力使用量（kWh）	
47	図 2-27	キャンパス別光熱水費（百万円）[2020（令和２）年度]	
48	写真 2-18-1	給水管のへこみ	
48	写真 2-18-2	配管に発錆	
48	写真 2-18-3	竪樋の破損	
48	図 2-29	電気配線の経年状況	
49	図 2-30	給水（上水）配管の経年状況	
49	図 2-31	排水（雑排水）配管の経年状況	
50	図 2-32	排水（雨水）配管の経年状況	
50	図 2-33	排水（汚水）配管の経年状況	
51	図 2-34	ガス配管の経年状況	
51	図 2-35	通信（情報ネットワーク）配線の経年状況	
52	図 2-36	通信（電話・EV インターホン）配線の経年状況	
52	図 2-37	通信（防災）配線の経年状況	

※記載なし：検討会作成

ページ	タイトル等		出典元
第３章			
53・54		３章扉	芸工広報リソース
56	図 3-1	キャンパスに分布する「継承すべきもの」	
57	写真 3-1-1	保存緑地のプロムナード	
57	写真 3-1-2	噴水広場	
57	写真 3-1-3	軸線上にあるシンボルツリー	
57	写真 3-1-4	建物に囲まれた広場（通称フライパン）	
57	写真 3-1-5	フライパンを囲む建物	
57	写真 3-1-6	多次元ホール	
59	図 3-2	大橋キャンパスのゾーニング	
60	図 2-2	戦略的リノベーションのイメージ	
62	図 3-4	大橋キャンパスの動線計画	
64	図 3-5	大橋キャンパスのランドスケープ計画	
65	図 3-6	全体計画レイヤーの重なり	
66	図 3-7	全体計画	
70	図 3-6	緑地・植栽帯のゾーニング計画	
70	写真 3-2-1	保存緑地のプロムナード	
70	写真 3-2-2	軸線上にあるシンボルツリー	
70	写真 3-2-3	建物外壁のナツヅタ	
71	写真 3-3-1	保存緑地のプロムナード クスノキ／ケヤキ	
71	写真 3-3-2	噴水広場 チャノキ／サツキツツジ／ドウダンツツジ	
71	写真 3-3-3	７号館前広場 ケヤキ	
71	写真 3-3-4	５号館前 クスノキ／ケヤキ／イチョウ／ソテツ	
71	写真 3-3-5	４号館 ナツヅタ	
71	写真 3-3-6	共用施設棟前 ヤマザクラ／ケヤキ／クロガネモチ	
71	写真 3-3-7	東側周辺境界部 アラカシ／ヤブツバキ	
71	写真 3-3-8	北門側周遊道路 ケヤキ／カイヅカイブキ	
73	図 3-7	計画・整備の対象建物	
74	表 3-1	-	
76	図 3-8	利用者属性による動線区分	
78	図 3-9	照度分布（整備目標達成後）	
78	図 3-10	-	
78	図 3-11	-	
82	図 3-12	ストリートファニチャーのゾーン計画	
84	図 3-13	サイン配置のゾーン計画	
86	図 3-14	事業イメージ	
88	図 3-15	キャンパスマスタープランの実現に向けた取組み体制	
0		裏表紙	©Google earth (Image Landsat)

※記載なし：検討会作成

九州大学大橋キャンパスマスタープラン検討会

九州大学大橋キャンパスマスタープラン検討会　委員名簿

所属等	氏名	
理事・副学長 大橋地区キャンパスマスタープラン検討会 委員長	福田　晋	
副学長・芸術工学研究院 研究院長 大橋地区キャンパスマスタープラン検討会 副委員長	谷　正和	（第１回～第２会検討会）
副学長・芸術工学研究院 研究院長 大橋地区キャンパスマスタープラン検討会 副委員長	尾本　章	（第３回～第４会検討会）
副理事・未来デザイン学センター センター長	清須美　匡洋	
副理事・芸術工学研究院 副研究院長 大橋地区キャンパスマスタープラン検討会 副委員長	田上　健一	
キャンパス計画室 教授	坂井　猛	
キャンパス計画室　准教授	鶴崎　直紀	
キャンパス計画室　助教	宮沢　良行	
施設部長	小谷　善行	
大橋地区事務部長	黒岩　由美	

九州大学大橋キャンパスマスタープラン検討会　オブザーバー名簿

所属等	氏名	
芸術工学研究院	朝廣　和夫	
福岡市南区役所	横内　正明 黒瀬　圭	
西日本鉄道株式会社	花村　武志	

検討会開催記録

○令和３年７月６日　**第１回検討会**
- 検討会設置の目的・体制について
- 検討会の進め方について
- 大橋地区フレームワークプランについて
- 大橋地区キャンパスの現況及び課題について
- 大橋地区キャンパスマスタープランの検討について

○令和３年９月 27 日　**第２回検討会**
- 第１章の修正案について
- 第２章 現状把握について
- 第３章 要素別計画について

○令和３年 12 月９日　**第３回検討会**
- 第１章・第２章の修正案について
- 第３章 要素別計画について

○令和４年３月９日　**第４回検討会**
- 第１章～第３章の修正案について

計画諸元

	現況	大橋キャンパスマスタープラン
年	2022年	2037年
計画人口定員	学生　1,303人 教職員　203人 合計　1,506人	1,500人
敷地面積	52,814㎡	52,814㎡
延床面積	41,271㎡	58,000㎡
容積率（第一種住居地域 200%）	78%	110%
駐車場	95台	110台

※今後変更の可能性あり

九州大学大橋キャンパスマスタープラン 2022

発行日：2022年5月
発行者：国立大学法人　九州大学
〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744
http://www.kyusyu-u.ac.jp/ja/

企画・編集：九州大学大橋地区キャンパスマスタープラン検討会
株式会社 環境デザイン機構